

2019年度文部科学省委託事業

「専修学校と地域の連携深化による職業教育魅力発信力強化事業」

専修学校と各地域の連携による「職業体感型教育」等の効果検証

専修学校の様々な取組を活用した

職業体感型教育の効果検証事業

事業成果報告書

公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会

はじめに

学校基本調査によれば、平成 31 年 3 月の北海道の高等学校等の卒業生数は 4 万 458 人で、10 年前の卒業生数に比べて約 14.5%の減少となっています。

次代を担うべき若者の減少は就労人口の減少につながり、我が国の活力の減退につながります。とりわけ広大な面積に対して人口密度が低い北海道における若者の減少は、地域の活力の減少、衰退につながる深刻な問題です。

専修学校では多年にわたって職業教育を行い、多くの若者を社会に送り出してきました。一方で、専門学校入学後の進路のミスマッチ、就職後の職業のミスマッチと早期離職などが大きな問題とされ、早い時期からの職業観、勤労観の醸成、いわゆるキャリア教育の必要性も叫ばれてきました。

公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会では、専修学校の協力を得て中学生や高校生などに対して、専修学校における体験講座や高等学校を訪問しての出前授業など、いわゆる職業体感型教育に取り組んできました。

地道な取組が実を結び、参加した中学生や高校生、教員や保護者の方々から高い評価をいただくとともに、行政とも連携して取り組むまでになりました。

さらにこのたび文部科学省の委託事業を活用して、連合会が取り組む職業体感型教育を客観的な視点から分析・評価して、関係の皆様とともにより効果的な職業体感型教育のすがたをご議論いただく機会をいただきました。

今年度、この取組に行政、中学校、高等学校、企業等の関係機関の皆様にご参画をいただきますとともに、多くの貴重なご意見を賜りました。

また、青森大学の金井一頼学長と大阪経済大学経営学部の吉野忠男教授には、職業体感型教育に関する分析・評価資料を作成していただきました。この資料により、これまでの様々な取組の理解と評価につながりました。

今後は今年度の職業体感型教育に関する分析・評価結果やご参画の皆様のご意見をもとに検討を進め、職業体感型教育の内容の向上に努めるとともに、新たに職業体感型教育に取り組む際の参考となる汎用モデルをご提案したいと考えています。このモデルを全国の専修学校各種学校連合会の皆様にご利用いただくことで、職業教育に対する理解が深まるとともに、中学生や高校生の職業観や勤労観の醸成につながることを願っています。

関係の皆様のご協力に心からお礼を申し上げますとともに、引き続き、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 3 月

公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会
理事長 吉 田 松 雄

目 次

はじめに	1
I 事業の概要	4
1 事業名	4
2 事業実施期間	4
3 事業の趣旨・目的	4
4 事業内容	4
5 事業の実施体制（イメージ）	6
II 職業体感型教育に関する分析・評価結果	7
1 分析・評価の概要	10
2 卒業後の就職・離職実態	12
2－1 卒業後の就職状況	12
2－2 就職後の離職状況	13
2－3 離職原因	16
2－4 職業選定上の課題	18
3 専門学校在学生の意識	20
3－1 専門学校在学生の意識調査結果（令和元年度）	20
3－2 専門学校の「職業体験講座」への参加実態（中学時代）	28
4 都道府県専各連における「職業体感型教育」の実施状況	30
5 先進的な取り組み事例	37
5－1 中学生を対象とした職業体感型教育	37
5－2 高校生を対象とした職業体感型教育	53
6 職業体感型教育の課題と今後の展望	72
6－1 職業体感型教育の課題	72
6－2 今後の展望	76

Ⅲ 組 織	80
1 職業体感型教育発信委員会・分科会	80
2 事業実証検討会	82
Ⅳ 会議等開催状況	83
1 第1回事業実証検討会（令和元年10月9日）	83
2 第1回職業体感型教育発信委員会（令和元年11月5日）	83
3 第2回事業実証検討会（令和元年12月2日）	84
4 第1回分科会（令和元年12月18日）	84
5 成果報告会（令和2年2月7日）	84
6 第3回事業実証検討会（令和2年2月10日）	85
7 第2回職業体感型教育発信委員会（令和2年2月14日）	85
Ⅴ 資料編	
1 職業体感型教育に関する取組	
（1）次世代人材職業体験推進事業	89
（2）進路探究学習オリエンテーリング事業	133
（3）高等学校内キャリア教育プログラム	161
（4）キャリアサポートセミナー	176
（5）専門学校等進路相談会	188
2 本事業で参考とした調査結果	
（1）「職業体感型教育」の実施状況に関する調査	207
（2）専門学校のオープンキャンパスにおける体験講座等の実施状況調査	211
（3）令和元年度専門学校在学生の意識調査	215
3 その他事業の実施に参考とした取組	
（1）専門学校勉強会	235

I 事業の概要

1 事業名

2019 年度専修学校と地域の連携深化による職業教育魅力発信力強化事業
専修学校と各地域の連携による「職業体感型教育」等の効果検証
専修学校の様々な取組を活用した職業体感型教育の効果検証事業

2 事業実施期間

令和元年 10 月 1 日～令和 2 年 3 月 13 日

3 事業の趣旨・目的

若年者人口の減少は地方においてより深刻であり、将来の労働人口、定住人口の減少は地方の衰退を招く大きな要因とされている。

また、若年労働者においては、職業観や勤労観の不足などによる雇用のミスマッチや早期離職が大きな課題とされている。

北海道において専修学校は、卒業者の就職率も高く、また卒業生の多くは道内に就職するなど、地域の振興に大きく寄与している。

専修学校は職業教育機関として、豊富な経験と知見を蓄積してきており、本事業では中学生及び高校生に職業体験講座を開催するとともに、生徒への進路指導を担う教員等に対して適切な専修学校情報や職業に対する情報を提供する取組を行うことにより、専修学校の職業教育機関としての魅力を発信するとともに、専修学校に関して適切な情報提供が行われる取組を展開する。

本事業の実施により、専修学校や職業教育に対する理解向上を図るとともに、中学・高校生の職業、勤労に対する理解向上、職業教育に関する教員の知見の深化により、職業適性のミスマッチや早期離職の減少に資する。

4 事業内容

(1) 中学生、高校生等を対象とした職業体験講座等の開催

これまで道内の中学生、高校生等に対して職業体感教育を実施してきており、これら開催実績を有する職業体験講座を活用して、中学生、高校生に対する職業観、勤労観の醸成と専修学校への理解増進を目的とした「職業体感型教育」の効果的手法を検討する。

〔本事業で分析・評価の対象とした職業体感型教育〕

- ・次世代人材職業体験推進事業（中学生を対象とした体験講座・北海道補助事業）
- ・進路探究学習オリエンテーリング事業（中学生を対象とした体験講座・札幌市教育委員会委託事業）
- ・高等学校内キャリア教育プログラム（高校生を対象とした出前授業・連合会主催事業）
- ・キャリアサポートセミナー（高校生を対象とした出前授業・北海道教育委員会主催事業）
- ・専門学校等進路相談会（高校生や保護者等を対象とした行事内で「職業説明・体験コーナー」を開催・北海道高等学校・専修学校連絡協議会主催事業）

（２）職業体感型教育等に関する調査

- ・ 専修学校、中学校並びに高等学校など「職業体感型教育」の関係機関（者）に調査を行い、参加した際の意見を収集し、効果や課題等を検討する際の資料とする。
- ・ 都府県の専各連における「職業体感型教育」の実施状況を調査し、内容、課題等を把握する。
- ・ 専門学校に在籍する生徒に対して専門学校入学までの経緯等を調査し、専門学校への進路決定の経緯や親や担任などとの相談の状況などを把握し、検討の際の参考資料とする。

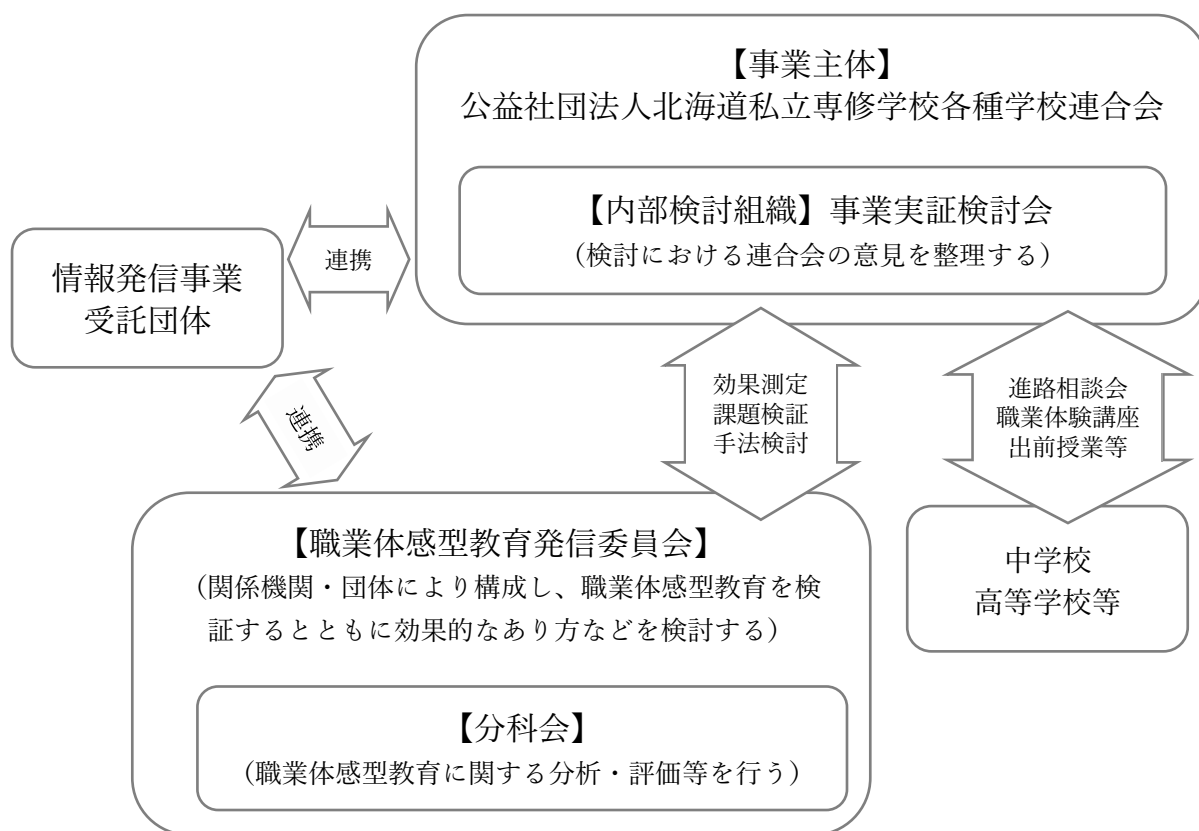
〔本事業で分析・評価の対象とした調査〕

- ・「職業体感型教育」の実施状況に関する調査（都道府県専各連を対象に実施した調査）
- ・次世代人材職業体験推進事業に参加した中学校、専門学校に対するアンケート調査
- ・進路探究学習オリエンテーリング事業に参加した中学生、保護者、専門学校に対するアンケート調査
- ・高等学校内キャリア教育プログラムに参加した高校生に対するアンケート調査
- ・キャリアサポートセミナーに参加した高校生、専門学校に対するアンケート調査
- ・専門学校在籍学生の意識調査（専門学校２年生に対する調査）
- ・専門学校のオープンキャンパスにおける体験講座等の実施状況調査

（３）職業体感型教育に関する分析・評価

「職業体感型教育」の取組実績や参加関係機関（者）の意見などを分析・評価し、効果や課題を明らかとし、より効果的かつ実地的な手法の検討の資料とする。

5 事業の実施体制（イメージ）



Ⅱ 職業体感型教育に関する分析・評価結果

1	分析・評価の概要	10
2	卒業後の就職・離職実態	12
2-1	卒業後の就職状況	12
2-1-1	高校卒業後の進路・就職（率）	12
2-1-2	大学卒業後の進路・就職（率）	12
2-2	就職後の離職状況	13
2-2-1	中学校卒業後就職者の離職状況	13
2-2-2	高校卒業後就職者の離職状況	14
2-2-3	短大等卒業後就職者の離職状況	15
2-2-4	大学卒業後就職者の離職状況	15
2-3	離職原因	16
2-4	職業選定上の課題	18
2-4-1	新規学卒就職者の事業所規模別就職後3年以内離職率	18
2-4-2	新規学卒就職者の産業別就職後3年以内離職率のうち離職率の高い上位5産業	18
3	専門学校在学生の意識	20
3-1	専門学校在学生の意識調査結果（令和元年度）	20
3-1-1	専門学校入学前の在籍先	20
3-2	専門学校の「職業体験講座」への参加実態（中学時代）	28
3-2-1	訪問した専門学校への進学（中学時代）	28
3-2-2	「職業体験講座」参加の入学影響	29
4	都道府県専各連における「職業体感型教育」の実施状況	30
5	先進的な取り組み事例	37
5-1	中学生を対象とした職業体感型教育	37
5-1-1	次世代人材職業体験推進事業（北海道補助事業）	37
5-1-2	進路探究学習オリエンテーリング事業（札幌市教育委員会委託事業）	44
5-2	高校生を対象とした職業体感型教育	53
5-2-1	専門学校等進路相談会	53
5-2-2	高等学校内キャリア教育プログラム	54
5-2-3	キャリアサポートセミナー（北海道教育委員会主催事業）	63

6 職業体感型教育の課題と今後の展望	72
6-1 職業体感型教育の課題	72
6-1-1 専門学校への取り組み	73
6-1-2 学校（小・中・高）への要請	73
6-1-3 運営資金の確保	75
6-2 今後の展望	76
6-2-1 三位一体としての専門学校、児童・生徒・保護者、教員	76
6-2-2 新たな企業連携の枠組み	77
6-2-3 国・自治体との関係	78

図表目次

図表 2-1 高校卒業後の進学及び就職状況	12
図表 2-2 大学卒業後の進学及び就職状況	13
図表 2-3 中学卒業後の3年以内の離職状況	14
図表 2-4 高校卒業後の3年以内の離職状況	14
図表 2-5 短大等卒業後の3年以内の離職状況	15
図表 2-6 大学卒業後の3年以内の離職状況	16
図表 2-7 離職原因・理由	17
図表 2-8 事業所規模別大学・高校卒業生の3年以内離職率	18
図表 2-9 業種別大学・高校卒業生の3年以内離職率	19
図表 3-1 専門学校入学前の在籍状況	20
図表 3-2 専門学校進学を検討時期	21
図表 3-3 進路の相談相手	21
図表 3-4 専門学校進学勧奨の相手	22
図表 3-5 専門学校決定理由	23
図表 3-6 「体験入学」「学校見学会」参加状況	23
図表 3-7 技術の習得実感	24
図表 3-8 授業内容の比較	25
図表 3-9 専門性を生かした職種への就職の意向	25
図表 3-10 重視する仕事（職場）の選択理由	26
図表 3-11 職業意識	27
図表 3-12 「職業体験講座」参加実態（中学時代）	28
図表 3-13 訪問した専門学校への進学実態（中学時代）	29
図表 3-14 「職業体験講座」参加の入学影響	29

図表	4－1	「職業体感型教育」の実施状況	30
図表	4－2	経費負担状況	32
図表	4－3	「職業体感型教育」の効果	33
図表	4－4	「職業体感型教育」の課題（実施団体）	34
図表	4－5	「職業体感型教育」の課題（実施していない団体）	35
図表	5－1	次世代人材職業体験推進事業の実施状況	38
図表	5－2	事業の流れ	40
図表	5－3	担当教員の評価	41
図表	5－4	参加生徒の評価	42
図表	5－5	次年度の講座利用意欲	42
図表	5－6	「職業体験講座」実施状況（5年間）	45
図表	5－7	参加生徒のアンケート結果	47
図表	5－8	保護者のアンケート結果	49
図表	5－9	専門学校等進路相談会における質問・確認内容	53
図表	5－10	キャリア教育プログラムの区分・内容	54
図表	5－11	職業・職種講話実績	56
図表	5－12	専門学校講話実績	56
図表	5－13	体験型授業実績	57
図表	5－14	校内進学相談会実績	58
図表	5－15	職業・職種講話受講者の希望分野	59
図表	5－16	体験型授業受講者の希望分野	60
図表	5－17	受講者の職業決定ポイント	61
図表	5－18	受講者の進学選定先決定ポイント	62
図表	5－19	受講者の参考感	62
図表	5－20	会場ごとの講座名、専門学校、延べ受講者数	63
図表	6－1	専門学校と児童・生徒・保護者、教員の三位一体化	77
図表	6－2	企業との新たな連携構図	78
図表	6－3	国・自治体との関係構図	79

1 分析・評価の概要

この分析・評価結果は、文部科学省委託事業「専修学校と地域の連携深化による職業教育魅力発信力強化事業-専修学校と各地域の連携による「職業体感型教育」等の効果検証-」において、職業体感型教育の効果を検証するとともに、あり方を協議した成果である。この協議には、「職業体感型教育発信委員会」を組織し、北海道内の専門学校、高等学校、中学校の各種連携の実績及びアンケート調査を分析、検討のうえ今後の「職業体感型教育」の課題、あり方をとりまとめたものである。

さて、生徒、学生が中学校、高等学校、大学の卒業後、進学や就職を果たす中、とりわけ就職後の退職、離職いわゆる早期退職者は、「7・5・3」と比喻されるような実態にある。「7・5・3」は中卒者の7割、高卒者の5割、大卒者の3割が3年以内に退職することを意味する。中学生、高校生、大学生はそれぞれに目的をもって進学し学習の機会を得て一定の成績や単位を取得している。それは将来の担うべき仕事や企業内の業務担当などまさに就職を想定して勉学に励んでいるのである。もっとも現在の中学校、高等学校、大学は、医学部や薬学部などの専門課程を除いて、例えば銀行や保険会社、メーカーなどへの就職を想定して教育カリキュラムが構成されている訳ではなく、卒業後に各分野への幅広い就業に向けて汎用性のある能力の習得を指向している。その中で、専門学校は特定分野における必要な知識や技術の習得を行い、その専門家を養成している。専門学校はそうした専門家を養成しているにもかかわらず早期退職者の割合は一定の水準にあるといわれている。

では、卒業生はどのような理由で早期退職に至っているのだろうか。退職理由は賃金などの労働条件をはじめ職場の人間関係など多岐にわたるが、独立行政法人労働政策研究・研修機構（2017）の調査によれば「自分がやりたい仕事とは異なる内容だったため」（男性 28.4%、女性 20.4%）、あるいは「学校で学んだことや、自分の技能・能力が活かされなかったため」（男性 18.2%、女性 9.2%）など生徒・学生の願望や習熟した能力が活かせないという深刻な問題が浮かび上がってくる。将来の目標や希望を持って入学してきた生徒・学生が習熟した能力を活かせない職場の現実を受け入れることは困難である。まして専門学校の卒業生は専門的な知識・技術を習熟した即戦力として企業側の高い期待を有している。企業は専門学校の卒業生として専門能力を評価した上で採用して

いる。専門学校卒業生の思いと企業の思いはおおむね一致しているものと考えられるが、退職者は少なからず存在し増加傾向にあるとの指摘がある。

こうした退職者を減らすことや就業意識を高めるために大学や専門学校では、学校主催の就職対策説明会や企業の合同説明会などへの参加を指導している。中でもインターンシップは就業体験の場として全国の大学や専門学校が意欲的に取り組み、一定の成果をあげている。大学や専門学校の中には企業側の評価も取り入れインターンシップを単位認定しているケースもある。単位認定は単位取得を目指す学生にしてみれば動機づけとなり積極的な参加につながる。企業はインターンシップを通じて学生の意欲や能力評価ができることから採用判断に有益との考えから多くの学生を受け入れている。しかし、現在のインターンシップは「ONE DAY インターンシップ」のように単なる業務説明会に陥っているケースや就業体験は名ばかりの「青田刈り」になっているケースなど問題点が指摘されている。長期のインターンシップは「アルバイト化」し講義欠席など学生本来の勉学に支障が出ているとの声も上がっている。

現在のインターンシップにいささか問題があるにせよ就業体験のような企業や仕事を知る機会は生徒や学生にとって貴重な機会であり、将来の企業や仕事の選択において重要な判断材料になることは否定できない。「職業体感型教育」は、生徒・学生が企業のインターンシップに参加し職業体験の機会を得ることとは異なり、将来担当する業務に必要な知識や技術を教授する教育活動として中学生や高校生に「職業体感」の機会を与えるという専門学校ならではの取り組みである。

本報告書は、北海道内の専門学校が中学校、高等学校と共同し「職業体感型教育」を実践することで、中学校、高等学校という早期の段階で職業意識を高めることに成果を上げている事例を解説している。また、「職業体感型教育」の実態を明らかにするために教育内容をはじめ参加した専門学校や生徒はもとより担当教員、中学校・高等学校そして保護者にアンケート調査を行っている。事例やアンケート調査からは「職業体感型教育」の現状から参加者・関係者それぞれの思いや今後の期待などが析出された。その結果をさらに分析・検討をくわえ「職業体感型教育」の課題を改めて整理し、今後の展望を取りまとめた次第である。

青森大学 学長 金井 一頼

大阪経済大学経営学部 教授 吉野 忠男

2 卒業後の就職・離職実態

2-1 卒業後の就職状況

2-1-1 高校卒業後の進路・就職（率）

「大学・短大進学者」は平成 21 年 3 月の 53.9%から平成 30 年 3 月まで若干の変動はあるものの 55%未満で推移している。「専門学校進学者」は平成 21 年 3 月の 14.7%から平成 25 年 26 年の 17.0%をピークに平成 30 年 3 月の 15.9%に低下している。「就職者」は平成 21 年 3 月の 18.2%をピークに若干の変動はあるものの平成 26 年から 17%台で推移している。「大学・短大進学者」と「専門学校進学者」、「就職者」は、平成 21 年からそれぞれ一定の割合で推移している。

図表 2-1 高校卒業後の進学及び就職状況

	卒業者	大学・短大 進学者	率	専門学校 進学者	率	就職者	率
平成21年3月	1,065,412	574,333	53.9%	156,363	14.7%	193,615	18.2%
平成22年3月	1,071,422	582,272	54.3%	170,352	15.9%	168,727	15.7%
平成23年3月	1,064,074	573,679	53.9%	172,200	16.2%	173,566	16.3%
平成24年3月	1,056,387	565,779	53.6%	177,486	16.8%	176,931	16.7%
平成25年3月	1,091,614	581,144	53.2%	185,588	17.0%	184,656	16.9%
平成26年3月	1,051,343	566,309	53.9%	178,735	17.0%	183,635	17.5%
平成27年3月	1,068,989	583,533	54.6%	178,069	16.7%	189,739	17.7%
平成28年3月	1,064,352	583,704	54.8%	173,629	16.3%	189,868	17.8%
平成29年3月	1,074,655	589,121	54.8%	173,939	16.2%	190,311	17.7%
平成30年3月	1,061,565	581,958	54.8%	169,058	15.9%	186,289	17.5%

出所：文部科学省「平成 30 年度学校基本調査（確定値）」をもとに筆者作成

2-1-2 大学卒業後の進路・就職（率）

大学卒業生の進学者、就職者は、平成 21 年 3 月の 14.0%、68.5%から翌平成 22 年に進学者が 15.9%に 1.9%増加したものの就職者は 60.8%（-7.7%）と大きく減少している。これは平成 20 年 9 月に起きたリーマンショックによる景気後退を見据え企業が採用枠を縮小したことが背景にある。その後平成 23 年から景気回復に呼応して上昇に転じ平成 30 年 3 月には 77.1%に達している。逆に、進学者は平成 30 年 3 月には 11.8%と平成 21 年 3 月と比較すれば 2.2%低下している。

図表 2－2 大学卒業後の進学及び就職状況

	卒業者	進学者	率	就職者	率
平成21年3月	559,539	78,265	14.0%	383,485	68.5%
平成22年3月	541,428	86,039	15.9%	329,190	60.8%
平成23年3月	552,358	82,657	15.0%	340,217	61.6%
平成24年3月	558,692	76,856	13.8%	357,088	63.9%
平成25年3月	558,853	72,822	13.0%	375,957	67.3%
平成26年3月	565,573	71,387	12.6%	394,845	69.8%
平成27年3月	564,035	68,958	12.2%	409,759	72.6%
平成28年3月	559,678	67,563	12.1%	418,163	74.7%
平成29年3月	567,763	67,734	11.9%	432,333	76.1%
平成30年3月	565,436	66,830	11.8%	436,156	77.1%

出所：文部科学省「平成30年度学校基本調査（確定値）」をもとに筆者作成

2－2 就職後の離職状況

2-2-1 中学校卒業後就職者の離職状況

中学卒業者のうち就職者は、1年以内の離職が平成21年から平成28年まで40%台で推移し、平成29年には36.6%とやや低下しているものの2年目が14%台に上昇している。平成30年は1年目が34.9%と平成26年から低下傾向にあり、平成21年から2年目の離職は12%から14%台で推移しているものの平成27年からは上昇傾向にある。3年目は7%台で推移し平成24年から平成28年には上昇傾向にあったが、平成29年には7.7%に低下している。3年以内の離職は平成21年から平成28年まで60%半ばの割合で推移している。

図表 2-3 中学卒業後の3年以内の離職状況

卒業	就職者数	3年目まで離職者数(人)				3年目まで離職率(%)			
	(人)		1年目	2年目	3年目		1年目	2年目	3年目
平成21年3月	1,222	785	507	162	116	64.2	41.5	13.3	9.5
平成22年3月	1,113	691	460	146	85	62.1	41.3	13.1	7.6
平成23年3月	1,192	773	534	149	90	64.8	44.8	12.5	7.6
平成24年3月	1,254	819	556	175	88	65.3	44.3	14.0	7.0
平成25年3月	1,094	697	460	156	81	63.7	42.0	14.3	7.4
平成26年3月	1,274	862	578	183	101	67.7	45.4	14.4	7.9
平成27年3月	1,335	856	569	173	114	64.1	42.6	13.0	8.5
平成28年3月	1,190	743	489	162	92	62.4	41.1	13.6	7.7
平成29年3月	1,138	579	416	163		50.9	36.6	14.3	
平成30年3月	1,115	389	389			34.9	34.9		

出所：厚生労働省「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」をもとに筆者作成

2-2-2 高校卒業後就職者の離職状況

高校卒業者のうち就職者は、1年以内の離職が平成21年から平成29年まで20%以内（平成29年だけ5から8%下回っている）で、2年目の離職は10%台の前半で推移している。3年目は8%から10%で推移し3年以内の離職は約40%の割合である。

図表 2-4 高校卒業後の3年以内の離職状況

卒業	就職者数	3年目まで離職者数(人)				3年目まで離職率(%)			
	(人)		1年目	2年目	3年目		1年目	2年目	3年目
平成21年3月	175,294	62,548	30,099	17,728	14,721	35.7	17.2	10.1	8.4
平成22年3月	151,813	59,586	29,645	17,223	12,718	39.2	19.5	11.3	8.4
平成23年3月	158,225	62,733	31,023	17,848	13,862	39.6	19.6	11.3	8.8
平成24年3月	163,446	65,405	32,297	19,107	14,001	40.0	19.8	11.7	8.6
平成25年3月	170,538	69,689	34,199	20,053	15,437	40.9	20.1	11.8	9.1
平成26年3月	170,591	69,588	33,284	20,454	15,850	40.8	19.5	12.0	9.3
平成27年3月	178,176	70,112	32,410	20,588	17,114	39.3	18.2	11.6	9.6
平成28年3月	178,579	69,972	31,031	20,943	17,998	39.2	17.4	11.7	10.1
平成29年3月	179,478	52,841	30,806	22,035		29.4	17.2	12.3	
平成30年3月	175,006	29,370	29,370			16.8	16.8		

出所：厚生労働省「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」をもとに筆者作成

2-2-3 短大等卒業後就職者の離職状況

短大等卒業者のうち就職者は、1年以内の離職が平成21年から平成30年まで20%以内で推移し、平成28年から平成30年には漸増傾向にある。2年目の離職は10%台の前半で推移しているが、平成25年から平成29年に上昇傾向にある。3年目は2年目と同様に10%台前半で推移し平成24年から平成28年には上昇傾向にある。3年以内の離職は40%前後の割合である。

図表 2-5 短大等卒業後の3年以内の離職状況

卒業	就職者数	3年目まで離職者数(人)				3年目まで離職率(%)			
	(人)		1年目	2年目	3年目		1年目	2年目	3年目
平成21年3月	148,986	58,617	25,479	16,982	16,156	39.3	17.1	11.4	10.8
平成22年3月	125,747	50,133	22,624	14,450	13,059	39.9	18.0	11.5	10.4
平成23年3月	121,464	50,076	22,544	14,156	13,376	41.2	18.6	11.7	11.0
平成24年3月	129,070	53,504	24,218	15,768	13,518	41.5	18.8	12.2	10.5
平成25年3月	133,648	55,756	25,253	15,971	14,532	41.7	18.9	12.0	10.9
平成26年3月	138,730	57,259	25,399	16,614	15,246	41.3	18.3	12.0	11.0
平成27年3月	149,840	62,190	27,071	18,281	16,838	41.5	18.1	12.2	11.2
平成28年3月	149,752	62,832	26,208	18,634	17,990	42.0	17.5	12.4	12.0
平成29年3月	150,386	46,479	26,611	19,868		30.9	17.7	13.2	
平成30年3月	149,358	26,519	26,519			17.8	17.8		

出所：厚生労働省「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」をもとに筆者作成

2-2-4 大学卒業後就職者の離職状況

大学卒業者のうち就職者は、1年以内の離職が平成21年から平成30年まで10%台前半で推移し、平成23年から平成30年まで漸減傾向にある。2年目の離職は平成29年まで約10%で推移し、平成27年からは上昇傾向にある。3年目は2年目と同様に10%以内で推移しているが、平成21年から平成28年まで漸増し1.6%上昇している。1年目の離職は同水準で推移しつつも2年目3年目は僅かながらも上昇傾向にある。3年以内の離職は平成28年度まで30%台前半の割合である。

図表 2-6 大学卒業後の3年以内の離職状況

卒業	就職者数 (人)	3年目まで離職者数(人)				3年目まで離職率(%)			
			1年目	2年目	3年目		1年目	2年目	3年目
平成21年3月	429,019	123,582	49,295	38,083	36,204	28.8	11.5	8.9	8.4
平成22年3月	365,500	113,390	45,864	36,508	31,018	31.0	12.5	10.0	8.5
平成23年3月	377,606	122,197	50,704	38,166	33,327	32.4	13.4	10.1	8.8
平成24年3月	398,320	128,714	52,204	40,981	35,529	32.3	13.1	10.3	8.9
平成25年3月	412,636	131,763	52,959	41,447	37,357	31.9	12.8	10.0	9.1
平成26年3月	427,932	137,962	52,733	45,192	40,037	32.2	12.3	10.6	9.4
平成27年3月	441,936	140,660	52,542	46,075	42,043	31.8	11.9	10.4	9.5
平成28年3月	448,309	143,360	51,158	47,471	44,731	32.0	11.4	10.6	10.0
平成29年3月	458,500	104,844	53,108	51,736		22.9	11.6	11.3	
平成30年3月	461,041	53,326	53,326			11.6	11.6		

出所：厚生労働省「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」をもとに筆者作成

2-3 離職原因

独立行政法人労働政策研究・研修機構では、①1982年4月～1995年3月生まれ（調査時21～33歳）で、②正社員として勤務した経験が1回以上ある人、③高校、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）、大学、大学院修士課程を卒業（修了）または中退した人を対象にアンケート調査を行った。結果は図表 2-7 離職原因・理由である。

男性の上位は、第一位「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかったため」31.8%、第二位「自分がやりたい仕事とは異なる内容だったため」28.4%、第三位「キャリアアップするため」28.1%の順である。女性の上位は、第一位「結婚・出産のため」33.8%、第二位「肉体的・精神的に健康を損ねたため」29.3%、第三位「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかったため」28.7%の順である。男女平均の上位は、第一位「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかったため」30.3%、第二位「肉体的・精神的に健康を損ねたため」28.1%、第三位「人間関係がよくなかったため」25.4%の順である。上位の労働条件や労働負担、人間関係は、就職後に直面する就職ならではの問題といえなくもないが、「自分がやりたい仕事とは異なる内容だったため」24.2%や「学校で学んだことや、自分の技能・能力が活かせられなかったため」7.7%は学生時代に習熟した能力を企業で活かせないという学生と企業とのミスマッチが推察される。また、労働条件や労働負担は、例えば、「賃金が安い」との認識は何と比較しているか判然としない場合があり、感覚的に「自分の賃金が安い」と思う傾向にある。これは「賃金をもっとほしい」という願望に起因すること

がありアンケート結果を慎重に確認する必要がある。むしろ「自分がやりたい仕事とは異なる内容だったため」や「学校で学んだことや、自分の技能・能力が活かされなかったため」は、実際の職業・職種と自らの職業・職種感のミスマッチを逡巡する教育を早期に実施し年月をかけて職業・職種を理解する機会があればある程度あるいは大幅に改善されることが期待される。

図表 2-7 離職原因・理由

項目	平均	男性	女性
結婚・出産のため	18.3%	2.7%	33.8%
肉体的・精神的に健康を損ねたため	28.1%	26.9%	29.3%
労働時間・休日・休暇の条件がよくなかったため	30.3%	31.8%	28.7%
人間関係がよくなかったため	25.4%	24.3%	26.5%
自分がやりたい仕事とは異なる内容だったため	24.2%	28.4%	20.4%
賃金の条件がよくなかったため	22.8%	26.9%	18.6%
仕事が上手くできず自信を失ったため	20.1%	22.0%	18.2%
ノルマや責任が重すぎたため	17.1%	17.3%	16.9%
会社に将来性がないため	20.6%	25.1%	16.0%
キャリアアップするため	20.8%	28.1%	13.4%
希望する条件により合った仕事が見つかったため	13.7%	18.2%	9.2%
通勤困難であるため	5.2%	3.4%	6.9%
学校で学んだことや、自分の技能・能力が活かされなかったため	7.7%	9.6%	5.7%
倒産、整理解雇又は希望退職に応じたため	4.5%	5.4%	3.6%
介護・看護のため	1.1%	1.2%	1.0%
その他	2.6%	3.4%	1.8%

出所：独立行政法人労働政策研究・研修機構（2017）『調査シリーズ No. 164 若年者の離職状況と離職後のキャリア形成（若年者の能力開発と職場への定着に関する調査）』をもとに筆者作成

2-4 職業選定上の課題

2-4-1 新規学卒就職者の事業所規模別就職後3年以内離職率

大学・高校の卒業生の離職率は、「1,000人以上」で大学卒24.2%、高校卒25.3%の割合にあるが、事業所規模が低下するに従い「5～29人」規模で大学卒49.3%、高校卒55.9%と約半数を超える割合になっている。「5人未満」では大学卒57.0%、高校卒64.3%の6割程度の水準に達している。

事業所規模が低下するほど大学卒・高校卒ともに離職率が上昇傾向にある。その傾向は事業所規模別では高校卒が大学卒を数パーセントから7パーセントほど上回ることがある。

図表 2-8 事業所規模別大学・高校卒業生の3年以内離職率

事業所規模	大学	高校
1,000 人以上	24.2% (▲0.1 P)	25.3% (±0.0 P)
500～999 人	29.6% (▲0.2 P)	32.9% (±0.0 P)
100～499 人	31.9% (±0.0 P)	36.5% (▲1.4 P)
30～99 人	39.0% (+0.2 P)	46.3% (▲0.8 P)
5～29 人	49.3% (▲0.9 P)	55.9% (▲0.5 P)
5 人未満	57.0% (▲2.1 P)	64.3% (+0.3 P)

※()内は前年比増減

出所：厚生労働省「新規学卒就業者の離職状況（平成27年3月卒業者）」

2-4-2 新規学卒就職者の産業別就職後3年以内離職率のうち離職率の高い上位5産業

産業別の就職後の離職率は、大学卒、第一位「宿泊業・飲食サービス業」49.7%、高校卒も同様であるが、63.2%と大学卒を14.5ポイント上回っている。大学卒、第二位は「教育・学習支援業」46.2%、第三位「生活関連サービス業・娯楽業」45.0%で以下「医療、福祉」37.8%、「小売業」37.7%の順である。高校卒、第二位「生活関連サービス業・娯楽業」59.2%、第三位「教育・学習支援業」56.5%と50%を超える割合である。以下、「小売業」48.8%、「医療・福祉」47.0%の順である。

前年比では、「宿泊業・飲食サービス業」「生活関連サービス業・娯楽業」「小売業」が大学卒、高校卒ともに低下傾向にあるが、低下割合は高校卒が「生活関連サービス業・

娯楽業」を除いて、「宿泊業・飲食サービス業」「小売業」の分野で大学卒をともに0.7ポイント上回っている。

図表 2-9 業種別大学・高校卒業生の3年以内離職率

大学		高校	
宿泊業・飲食サービス業	49.7% (▲0.5P)	宿泊業・飲食サービス業	63.2% (▲1.2P)
教育・学習支援業	46.2% (+0.8P)	生活関連サービス業・娯楽業	59.2% (▲0.2P)
生活関連サービス業・娯楽業	45.0% (▲1.3P)	教育・学習支援業	56.5% (+0.5P)
医療、福祉	37.8% (+0.2P)	小売業	48.8% (▲1.6P)
小売業	37.7% (▲0.9P)	医療、福祉	47.0% (+0.1P)

※()内は前年比増減

出所：厚生労働省「新規学卒就業者の離職状況（平成27年3月卒業者）」

3 専門学校在学生の意識

3-1 専門学校在学生の意識調査結果（令和元年度）

公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会（以下「北専各連」という。）が令和元年度に実施した「専門学校在学生の意識調査」結果を基に平成23年度から令和元年度までの専門学校生の意識について整理した（令和元年度調査は、専門学校2年生のうち1,785名から回答を得た）。

3-1-1 専門学校入学前の在籍先

専門学校生は、高等学校卒業者が平成23年度から80%以上で推移し令和元年には91.1%に達している。一方で、大学卒業は2%前後で推移し社会人が平成23年度10.3%から変動は見られるものの令和元年には4.4%に低下し平成23年度と比較すると半減している。短大卒業者は、平成25年度の1.1%をピークに、その後漸減し令和元年度には0.1%の割合である。

図表 3-1 専門学校入学前の在籍状況

	高等学校	短大	大学	社会人	予備校	その他	無回答
平成23年度	82.8%	0.7%	2.8%	10.3%	1.1%	2.0%	0.3%
平成24年度	89.4%	0.5%	1.9%	5.2%	1.1%	1.8%	0.0%
平成25年度	89.1%	1.1%	1.8%	5.3%	0.6%	1.7%	0.5%
平成26年度	88.6%	0.4%	2.0%	6.2%	0.4%	2.2%	0.2%
平成27年度	88.0%	0.3%	2.0%	6.7%	0.7%	1.5%	0.7%
平成28年度	88.9%	0.2%	2.5%	4.1%	1.3%	1.7%	1.3%
平成29年度	88.7%	0.3%	2.0%	4.7%	0.9%	2.3%	1.0%
平成30年度	87.4%	0.3%	2.2%	7.1%	1.0%	1.8%	0.1%
令和元年度	91.1%	0.1%	1.8%	4.4%	0.4%	1.6%	0.4%

出所：北専各連

（1）専門学校進学検討の時期

専門学校への進学を検討した時期は、平成23年度から高校3年生が最も高い割合（平成25年度52.4%をピークに以降40%台で推移している）を示している。高校2年生は平成28年度30.4%をピークに以降割合が低下したものの令和元年に向けて漸増の傾向が見られ

る。高校1年生は平成23年度から変動が見られるものの漸増傾向にあり令和元年に12.6%で過去最高の割合を示している。中学生は平成23年度から10%未満ではあったものの漸増傾向にある。

図表 3-2 専門学校進学を検討時期

	高校1年生	高校2年生	高校3年生	中学生	短大・大学	社会人	浪人	その他	無回答
平成23年度	8.0%	22.0%	47.1%	6.6%	3.2%	10.4%	1.0%	1.0%	0.1%
平成24年度	8.2%	26.0%	50.6%	4.7%	2.0%	5.2%	1.4%	1.4%	0.1%
平成25年度	8.9%	24.2%	52.4%	6.1%	1.9%	4.5%	1.2%	1.2%	0.1%
平成26年度	9.0%	25.3%	48.9%	6.0%	1.6%	6.1%	1.1%	1.1%	0.9%
平成27年度	11.9%	25.5%	44.6%	6.6%	2.0%	7.0%	0.9%	0.0%	1.5%
平成28年度	10.5%	30.4%	44.1%	6.0%	2.0%	4.6%	0.7%	1.4%	0.4%
平成29年度	11.5%	26.5%	45.8%	5.7%	2.3%	4.5%	0.8%	1.7%	1.1%
平成30年度	9.3%	28.1%	42.6%	7.6%	1.8%	6.5%	2.1%	1.1%	0.9%
令和元年度	12.6%	29.7%	40.8%	7.5%	1.6%	4.6%	1.1%	1.6%	0.5%

出所：北専各連

(2) 進路の相談相手

専門学校への進路相談は、第一位「母親」が最も高い割合 30%前後で推移し、第二位に「担任の先生」で20%前後、第三位「両親」が20%未満で推移している。第四位には「自分で決めた」が平成23年度20.3%をピークに令和元年13.4%まで漸減している。「進路の先生」が平成29年度から4%台で推移している。進路に関しては情報量が豊富な進路指導の先生が相談相手として最も適任だと考えられるが、4%台と低位にある。

図表 3-3 進路の相談相手

	担任の先生	進路の先生	クラブ、部活の先生	父親	母親	兄弟姉妹	友人	先輩	自分で決めた	両親	その他	無回答
平成23年度	16.1%	4.9%	0.9%	3.7%	29.3%	1.1%	5.0%	0.9%	20.3%	15.3%	2.0%	0.5%
平成24年度	18.5%	5.6%	0.9%	4.5%	27.0%	0.6%	5.8%	1.0%	18.3%	16.0%	1.4%	0.3%
平成25年度	20.1%	4.8%	1.1%	4.5%	27.3%	1.1%	5.3%	0.5%	15.3%	18.6%	1.2%	0.4%
平成26年度	17.2%	6.5%	1.0%	5.1%	30.0%	0.8%	4.4%	0.9%	16.6%	15.3%	1.7%	0.6%
平成27年度	19.6%	4.7%	1.2%	2.3%	31.0%	0.9%	4.2%	0.6%	16.3%	17.4%	1.7%	0.1%
平成28年度	21.3%	5.6%	1.6%	3.7%	28.9%	1.2%	5.5%	0.7%	13.9%	16.4%	1.2%	0.1%
平成29年度	18.3%	4.4%	1.5%	2.8%	31.0%	1.2%	3.9%	0.8%	14.3%	16.7%	1.6%	3.6%
平成30年度	20.4%	4.1%	1.1%	3.6%	29.6%	1.1%	4.3%	0.4%	13.6%	16.8%	1.6%	3.2%
令和元年度	17.5%	4.0%	0.8%	3.4%	32.4%	1.2%	4.0%	0.2%	13.4%	17.0%	1.5%	4.5%

出所：北専各連

(3) 専門学校進学勧奨の相手

専門学校進学を勧奨しているのは、「母親」で平成 23 年度から 25%台で推移し令和元年度では 29.2%に達し最も高い割合を示している。同水準の割合で「自分で決めた」が 25%前後で推移している。もっとも勧奨の相手としては「自分で決めた」ことは、勧奨の相手が「自分自身」であるという意味では前問アンケートの相談相手としての「自分で決めた」が令和元年度で 13.4%、本問アンケートの勧奨相手としての「自分で決めた」が令和元年度で 25.7%であり 10%以上の差異には考慮すべき点がある。次に高位であったのが「担任の先生」で 15%前後から 18%台で推移している。「進路の先生」は 6%前後で推移し、「友人」は 8%前後の推移で「父親」をやや上回るものの同水準に止まっている。

図表 3-4 専門学校進学勧奨の相手

	担任の先生	進路の先生	クラブ、部活の先生	父親	母親	兄弟姉妹	友人	先輩	自分で決めた	その他	無回答
平成23年度	15.7%	5.5%	0.8%	7.2%	25.3%	2.2%	8.9%	1.9%	25.3%	6.2%	0.9%
平成24年度	15.7%	5.9%	1.2%	6.8%	25.9%	1.4%	7.7%	2.2%	28.0%	4.6%	0.6%
平成25年度	18.2%	6.6%	1.1%	6.3%	25.0%	2.2%	7.7%	2.4%	26.2%	3.2%	1.0%
平成26年度	17.7%	7.2%	1.0%	6.7%	25.1%	1.9%	8.6%	1.7%	25.7%	4.0%	0.3%
平成27年度	16.0%	6.3%	1.0%	5.4%	26.6%	1.2%	8.0%	2.7%	26.8%	5.1%	0.9%
平成28年度	15.9%	6.9%	1.5%	6.7%	28.6%	1.7%	8.6%	2.4%	23.8%	3.7%	0.2%
平成29年度	18.1%	6.1%	1.6%	5.0%	26.5%	1.6%	7.6%	2.1%	24.7%	5.0%	1.6%
平成30年度	17.9%	6.9%	1.5%	5.7%	26.8%	2.4%	6.6%	2.6%	23.8%	4.8%	1.0%
令和元年度	15.2%	5.7%	1.3%	4.3%	29.2%	2.2%	8.0%	2.2%	25.7%	4.5%	1.5%

出所：北専各連

(4) 専門学校進学決定理由

専門学校進学決定の理由は、「希望する職業に就職」が最も高い割合を示し、次いで「希望する資格取得」があり就職と資格取得は 60%強の割合に達している。さらに「希望する技術習得」まで含めると 80%程度の割合になる。専門学校で学習する意味と自己の目的を明確に理解しているものと推察される。

一方で、「希望する会社就職」は平成 23 年度から 2%前後から 2%を下回る割合である。具体的な会社への就職を目標にしているというより職業そのものへの関心が高いことが推察される。

図表 3-5 専門学校決定理由

	希望する 職業に就職	希望する 会社に就職	希望する 資格取得	希望する 学習可能	希望する 技術習得	その他	無回答
平成23年度	36.2%	1.6%	28.3%	11.6%	17.1%	4.9%	0.3%
平成24年度	33.8%	1.4%	26.0%	12.6%	17.9%	7.8%	0.5%
平成25年度	36.4%	1.7%	22.9%	13.7%	18.8%	5.9%	0.6%
平成26年度	35.8%	1.3%	29.3%	10.9%	16.9%	5.5%	0.4%
平成27年度	37.2%	1.1%	29.8%	11.3%	15.8%	3.8%	1.0%
平成28年度	33.6%	2.3%	31.2%	10.8%	17.6%	3.3%	1.3%
平成29年度	37.5%	2.5%	25.5%	12.6%	16.4%	4.6%	0.9%
平成30年度	34.7%	1.8%	34.3%	10.3%	13.9%	4.0%	1.0%
令和元年度	37.7%	1.6%	28.8%	11.9%	15.0%	3.8%	1.2%

出所：北専各連

(5) 専門学校の「体験入学」「学校見学会」参加状況

「体験入学」「学校見学会」の参加状況は、80%台前半から後半までの変動はあるものの高い割合で推移している。「体験入学」「学校見学会」の認知度が一定の水準にあることと参加者の評価や満足度が高いものと考えられる。実際、参加者のアンケート結果からも高い満足度がうかがえる。

図表 3-6 「体験入学」「学校見学会」参加状況

	はい	いいえ	無回答
平成23年度	77.3%	22.4%	0.4%
平成24年度	81.0%	18.4%	0.5%
平成25年度	83.5%	15.6%	1.0%
平成26年度	83.8%	15.2%	1.0%
平成27年度	83.4%	15.8%	0.8%
平成28年度	84.3%	15.0%	0.7%
平成29年度	86.4%	12.7%	0.9%
平成30年度	83.9%	16.0%	0.1%
令和元年度	87.4%	14.0%	0.0%

出所：北専各連

(6) 技術の習得実感

技術の習得実感は、「これから身につく」が平成23年度と24年度が60％台半ばで最も割合を示していたが、その後50％台で推移している。次に「身についている」が40％台で推移している。「身についていない」が5％を下回る結果から学生の高い学習意欲がうかがえる。

図表 3－7 技術の習得実感

	身についている	これから身につく	身についていない	無回答
平成23年度	30.7%	64.3%	4.6%	0.4%
平成24年度	29.7%	64.4%	5.4%	0.5%
平成25年度	36.4%	56.4%	6.3%	0.9%
平成26年度	41.4%	52.9%	5.0%	0.8%
平成27年度	38.7%	56.4%	3.7%	1.2%
平成28年度	42.7%	51.4%	5.4%	0.6%
平成29年度	38.0%	56.4%	4.8%	0.9%
平成30年度	35.1%	59.4%	4.5%	1.0%
令和元年度	41.6%	53.2%	3.8%	1.4%

出所：北専各連

(7) 専門学校と高等学校の授業内容比較

専門学校と高等学校の授業内容比較は、「難しいけれど理解できる」と「まあまあ（普通）だと思う」が変動あるいは逆転はあるものの30％台で推移している。「難しくて理解しにくい」が平成23年度17.0％と最も高い割合を示したものの令和元年まで漸減している。一方、「理解しやすい」は平成23年度12.0％から令和元年にかけて漸増している。

図表 3-8 授業内容の比較

	理解しやすい	難しいけれど 理解できる	まあまあ（普通） だと思う	難しく 理解しにくい	その他	無回答
平成23年度	12.0%	36.0%	32.0%	17.0%	1.8%	1.3%
平成24年度	11.9%	29.7%	40.3%	14.6%	2.4%	1.0%
平成25年度	13.9%	29.4%	40.4%	13.5%	1.6%	1.1%
平成26年度	14.5%	33.2%	37.8%	11.7%	1.3%	1.5%
平成27年度	14.2%	37.3%	33.4%	12.8%	1.2%	1.2%
平成28年度	16.4%	37.0%	31.3%	13.5%	0.7%	1.2%
平成29年度	14.8%	34.7%	36.2%	12.3%	0.7%	1.3%
平成30年度	13.0%	36.8%	35.0%	12.0%	1.7%	1.5%
令和元年度	15.3%	36.4%	33.5%	11.6%	1.3%	2.0%

出所：北専各連

(8) 専門性を生かした職種への就職

専門性を生かした職種への就職は、「はい」が平成23年度63.3%から漸増傾向にあり令和元年に70.4%に達している。「出来ればつきたい」との回答を合計すると90%以上となる。学習した成果をふまえそれが活かせる職種への就職を希望している実態がうかがえる。

図表 3-9 専門性を生かした職種への就職の意向

	はい	いいえ	出来れば つきたい	出来れば つきたくない	無回答
平成25年度	63.3%	2.5%	29.4%	2.6%	2.2%
平成26年度	66.5%	2.5%	26.1%	3.4%	1.5%
平成27年度	66.2%	2.6%	25.9%	3.7%	1.7%
平成28年度	66.1%	3.2%	26.0%	3.0%	1.7%
平成29年度	68.0%	2.3%	25.7%	2.3%	1.7%
平成30年度	68.8%	1.5%	25.8%	1.9%	2.0%
令和元年度	70.4%	1.4%	23.8%	2.2%	2.2%

出所：北専各連

(9) 重視する仕事（職場）の選択理由

重視する仕事（職場）の選択理由は、令和元年度では第一位「給料」21.7%、第二位「人間関係」18.5%、第三位「やりがいがある」17.5%、第四位「資格をいかせる」11.3%、第五位「休暇」9.6%の順である。「仕事内容・社会的評価」が令和元年度9.1%であるが、平成23年度から平成29年度まで11%前後で「資格をいかせる」と同水準であった。また、「やりがいがある」が平成23年度28.7%と最も高い割合を示していたが、年度を追うごとに漸減し平成23年度28.7%と令和元年度17.5%を比較すると11.2%と大幅に低下している。「給料」よりも「やりがいがある」ことを重視していたが、「やりがいがある」よりも「給料」を重視する傾向に変化している。

図表 3-10 重視する仕事（職場）の選択理由

	資格を いかせる	給料	休暇	人間関係	仕事内容 社会的評価	やりがい がある	勤務地	その他	無回答
平成25年度	11.9%	16.3%	4.1%	17.3%	11.2%	28.7%	8.2%	0.2%	2.0%
平成26年度	10.1%	18.1%	5.1%	18.4%	11.7%	25.0%	8.3%	0.9%	2.4%
平成27年度	12.8%	18.0%	6.8%	17.7%	11.7%	23.0%	7.4%	1.0%	1.7%
平成28年度	15.0%	20.2%	7.1%	15.7%	12.1%	21.7%	5.7%	0.9%	1.7%
平成29年度	11.4%	22.2%	7.9%	15.6%	11.2%	21.9%	5.7%	0.8%	3.3%
平成30年度	13.9%	20.4%	8.2%	18.5%	8.9%	19.2%	5.7%	0.9%	4.3%
令和元年度	11.3%	21.7%	9.6%	18.5%	9.1%	17.5%	5.7%	1.3%	5.2%

出所：北専各連

(10) 「働かなければならない」職業意識

「働かなければならない」という職業意識は、平成25年度が「思う」58.1%で、次の「どちらでも良い」34.3%を23.8%も上回っていた。「どちらでも良い」が漸増する一方で、「思う」が漸減し、令和元年度に至っては「どちらでも良い」47.7%、「思う」41.7%と完全に逆転している。「思わない」が平成25年度4.2%から令和元年度7.3%と約4%上昇している。専門学校生の職業意識の変化が認められる。

図表 3－11 職業意識

	思 う	思 わない	ど ち ら で も 良 い	そ の 他	無 回 答
平成25年度	58.1%	4.2%	34.3%	1.3%	2.1%
平成26年度	58.2%	5.1%	33.3%	2.0%	1.4%
平成27年度	57.4%	4.8%	34.7%	1.7%	1.4%
平成28年度	53.1%	6.9%	36.7%	1.3%	2.0%
平成29年度	48.4%	9.3%	39.6%	1.2%	1.6%
平成30年度	49.9%	6.5%	40.5%	1.2%	1.9%
令和元年度	41.7%	7.3%	47.7%	1.1%	2.2%

出所：北専各連

3-2 専門学校の「職業体験講座」への参加実態（中学時代）

中学時代の「職業体験講座」への参加は80%台と高い割合で「いいえ」と回答している。平成26年度27年度がそれぞれ87.5%、85.3%と高い割合を示していたが、その後は80%台前半で推移している。一方で、「はい」との回答は平成26年度から平成29年度にかけて上昇傾向にあり平成30年度に幾分低下したものの令和元年度で上昇に転じている。「職業体験講座」が一定の水準で評価の獲得や成果が認知されたことが推察される。

図表 3-12 「職業体験講座」参加実態（中学時代）

	はい	いいえ	無回答
平成26年度	10.9%	87.5%	1.5%
平成27年度	13.2%	85.3%	1.5%
平成28年度	16.4%	81.5%	2.1%
平成29年度	17.0%	81.3%	1.7%
平成30年度	15.0%	83.2%	1.8%
令和元年度	16.4%	81.4%	2.2%

出所：北専各連

3-2-1 訪問した専門学校への進学（中学時代）

訪問した専門学校への進学実態は、平成29年度の「無回答」38.5%の割合が最も高かった年度を除いて、「いいえ」が平成26年度55.4%から平成30年度79.4%と24%大きく上昇している。令和元年度70.6%と約9%低下したものの令和元年度「はい」28.7%との比較では約40%の差が開いている。また、平成26年度「はい」43.1%と令和元年度28.7%を比較しても約15%低下している。これは中学生が進路先に関する知識がないことやそもそも進路そのものを考えていなかったことなどが原因と考えられる。一方で、中学時代の訪問で刺激を受け専門学校への進学を動機付けた生徒の存在も否定できない。いずれにしても高校生になって本格的な進路の検討が始まるという実態をあらわしているものと推察される。

図表 3-13 訪問した専門学校への進学実態（中学時代）

	はい	いいえ	無回答
平成26年度	43.1%	55.4%	1.5%
平成27年度	44.0%	55.3%	0.6%
平成28年度	44.2%	51.3%	4.4%
平成29年度	33.7%	27.8%	38.5%
平成30年度	20.6%	79.4%	0.0%
令和元年度	28.7%	70.6%	0.7%

出所：北専各連

3-2-2 「職業体験講座」参加の入学影響

「職業体験講座」に参加したことによる専門学校への入学は、「あった」が平成29年度31.9%と比較的高い水準にあったものの令和元年度では21.2%と約10%低下している。「多少あった」平成29年度27.0%を加えても58.9%から令和元年度では41.3%と約18%低下している。一方、平成29年度「なかった」24.1%は令和元年度16.4%と約8%低下し、「あまりなかった」平成29年度15.9%を加えると40%から令和元年度27.3%とやはり約13%低下している。平成30年度42.6%、令和元年度31.4%と「無回答」の割合が高いことが影響しているものと考えられる。

図表 3-14 「職業体験講座」参加の入学影響

	あった	多少あった	あまり なかった	なかった	無回答
平成29年度	31.9%	27.0%	15.9%	24.1%	1.1%
平成30年度	18.1%	14.7%	14.7%	9.8%	42.6%
令和元年度	21.2%	20.1%	10.9%	16.4%	31.4%

出所：北専各連

4 都道府県専各連における「職業体感型教育」の実施状況

北専各連では文部科学省委託事業の実施に当たり、令和元年10月に北海道外の各都府県の専修学校各種学校連合会に対して「職業体感型教育」の実施状況を調査した。調査結果は以下のとおりである。

実施団体の内訳は、実施団体29件（61.7%）、未実施団体15件（31.9%）、無回答3件（6.4%）であった。

「職業体感型教育」の実施状況は、中学校では出前授業（中学校や高校を会場にしている場合）が12件19.7%、高校では14件23.0%であった。一方、職業体験講座は中学校で7件11.5%、高校で10件16.4%、いずれも出前授業の方が高い割合を示している。

その他では、小学校を対象に開催しているケースや保護者、留学生を対象にしているケースもあり幅広く出前授業を開催している。会場もコンベンションセンターや公民館など公的な機関を会場に開催しているケースもある。また、就職対策のような就職をテーマにしたケースもある。

図表 4－1 「職業体感型教育」の実施状況

項目	件数	%
中学生を対象として、中学校を会場として行う出前授業	12	19.7
中学生を対象として、専門学校を会場として行う職業体験講座	7	11.5
高校生を対象として、高等学校を会場として行う出前授業	14	23.0
高校生を対象として、専門学校を会場として行う職業体験講座	10	16.4
※その他	18	29.5
計	61	100.0

出所：北専各連

※その他

- ・会場方式ガイダンスの職業体験型行事を開催している。今年度は会員校 42 校が参加予定
- ・毎年、中・高生を対象にイベント会場で専門学校のブースを設けて体験型の情報提供イベントを開催している
- ・小学 4 年生から一般までを対象に、実施校が講座を設定して、専門学校を会場に実施している
- ・中学生のほか小学 4 年生から 6 年生までを対象に、専門学校を会場に行っている
- ・公民館等で社会人一般を対象とした出前講座を開催している
- ・高校生、教職員、保護者を対象として、公的施設を会場に専門学校生の作品展示・発表や職業体験を行う専門学校フェアを開催している
- ・日本語学校の留学生を対象に、日本語学校を会場とした出前授業を開催している
- ・小学生を対象とした行事を計画している
- ・コンベンションセンター等を会場として、小学生を対象とした「しごと体験」ができる行事を開催
- ・コンベンションセンターを会場に中学・高校生を対象とした「お仕事体験フェスタ」を開催している
- ・専門学校を会場とした体感型教育を提案しているが、申し込みはない
- ・中学・高校生のほか、小学生を対象とした行事も開催している
- ・県が主催する「就職・進学体験フェア」に参加し、高校 1 年生及び保護者約 2,500 名に、各校のプログラムを体験してもらっている（今年度で 4 回目）
- ・「しごとミュージアム」という高校生を対象とした体験事業を 10 年近く開催している
- ・小学 4 年生から高校生（主に小中学生）を対象に、専門学校を会場とした職業体験講座「夏休み職業体験」を開催している
- ・高校生を対象に、ガイダンス業者とコラボした会場で行う進学相談会のなかで実施している

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

経費負担は、専各連21件36.8%、専門学校22件38.6%で、専各連と専門学校を合わせると75.4%に達する。次に都道府県や市町村の補助金等11件19.3%と続くが、専各連及び専門学校のほぼ半分程度の負担水準である。専各連と専門学校の合計では4分の1程度の水準にとどまっている。とりわけ参加する専門学校の負担は各校の単独負担であって決して軽い負担状況にはない。専門学校が開講講座に対する評価が一定の水準にあるにもかかわらず参加すればするほど専門学校の負担が増すという状況では今後の開催拡大は厳しい状況にあるものと推察される。

その他では、2件と少数ながら「参加者に材料費の一部負担をお願いする場合がある」との回答は材料などを使用する体感型教育では実費として負担をお願いせざるを得ない事情が背景にあるものと考えられる。

図表 4-2 経費負担状況

項目	件数	%
専各連	21	36.8
参加する専門学校	22	38.6
中学校及び高等学校（金銭的な負担がある場合のみ）	1	1.8
都道府県や市町村の補助金等	11	19.3
※その他	2	3.5
計	57	100.0

※その他

- ・受講料は無料（実施校負担）だが、参加者に材料費の一部負担をお願いする場合がある
- ・私立大学協会や参加企業
- ・受講料は無料（実施校負担）だが、参加者に材料費の一部負担をお願いする場合がある
- ・私立大学協会や参加企業

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

「職業体感型教育」の効果は、「専門学校教育への理解が増す」27件 33.8%が最も高く、次に「専門学校への入学希望者が増える」22件 27.5%と続き、「就職希望者の地元定着が増える」13件 16.3%が上位3回答である。「職業のミスマッチや早期の離職が減る」との回答は10件 12.5%で、早期の職業教育に一定の理解を示す水準となっている。

図表 4-3 「職業体感型教育」の効果

項目	件数	%
専門学校教育への理解が増す	27	33.8
専門学校への入学希望者が増える	22	27.5
専門学校の中退者が減る	2	2.5
職業のミスマッチや早期の離職が減る	10	12.5
就職希望者の地元定着が増える	13	16.3
※その他	6	7.5
計	80	100.0

※その他

- ・中学生や高校低学年から職業を体験することにより、将来に向かって早めに職業意識を育成できる
- ・専門学校だけでなく高等専修学校に対する理解が増し、入学希望者が増える
- ・職業観の醸成や自身の進路または将来への意識を高める
- ・進学に関するミスマッチを防ぐ
- ・地元の専門学校の周知
- ・地元進学が増える（県外流出が減る）
- ・将来の進路選択に役立つ
- ・進学か就職か決まっていない生徒にとって、進路について考える機会となる
- ・資格取得について事前に学習する必要性と専門学校の職業教育というものを伝えることができる
- ・専門学校の存在を知ってもらう機会となる（特に小学生）

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

「職業体感型教育」の課題は、第一位は「専門学校の経費負担が大きい」11件20.0%、第二位は「専門学校の人的負担が大きい」9件16.4%、同数同割合で「行政がもっと関わってほしい」である。その他は件数16件、割合29.1%と最も多くなっているが、開催時間、経費負担、人的負担、現状の問題点など多岐にわたる問題意識が表出している。中学校や高校の関心や取り組みに対し、今後の職業体感型教育のあり方を考える上で重要な意見、主張といえる。

図表 4－4 「職業体感型教育」の課題（実施団体）

項目	件数	%
専各連として実施経費を捻出できない	7	12.7
専門学校を経費負担が大きい	11	20.0
専門学校の人的負担が大きい	9	16.4
効果がわからない	3	5.5
行政がもっと関わってほしい	9	16.4
※その他	16	29.1
計	55	100.0

※その他

- ・キャリア教育に効果的と考えているが、利用する中学校や高校が少ない
- ・受講を希望する中学、高校が広がらない
- ・平日の夕方に開催しており、高校生を中心とした参加者の確保が課題（公的施設での専門学校フェアの開催）
- ・参加が特定の高校に限られている
- ・各校の広報ではなく教育の一環として実施することへの理解など、実施主体と専門学校の目的の合致が必要
- ・地元の理解
- ・規模が大きくなるにつれて目的がぶれるため、モチベーション等の保持や確認
- ・専各連と参加校による経費負担には限界があり、高校生向けの職業体験行事は今年度で終了する
- ・県の理解を得られており特段の課題はないが、しいて言うなら経費面ではなくマンパワーが原因で参画、実施が難しい会員校がある。
- ・会員校の参画の確保（中学校を対象とした出前授業に出向く学校の確保など）
- ・体験講座に参加する生徒の伸び悩み

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

「職業体感型教育」を実施していない団体は、件数は少ないものの「専各連として実施経費を捻出できない」5件 27.8%、「専門学校の人的負担が大きい」3件 16.7%、「専門

学校の経費負担が大きい」2件 11.1%、「効果がわからない」2件 11.1%、「行政が主体的に行うべき」1件 5.6%の順である。いずれも人的資金的経費の負担に対し懸念がある一方で、「職業体感型教育」そのものに疑念を抱いている団体もある。「職業体感型教育」を実施していない以上、経費をどのように認識しているか判然としないが、その他では専門学校が独自に開催しているケースやオープンキャンパスで代替しているケースなど団体独自の方針や経緯を優先していることがうかがえる。

図表 4－5 「職業体感型教育」の課題（実施していない団体）

項目	件数	%
専各連として実施経費を捻出できない	5	27.8
専門学校の経費負担が大きい	2	11.1
専門学校の人的負担が大きい	3	16.7
効果がわからない	2	11.1
行政が主体的に行うべき	1	5.6
※その他	5	27.8
計	18	100.0

※その他

- ・ 専門学校が行うオープンキャンパスのほうが効率が良い
- ・ 高校の進路指導は大学進学に重点が置かれ、専門学校に目を向けていない
- ・ 専門学校が各校独自で実施しており、専各連が取りまとめて実施するニーズがない
- ・ 県からの助成金を得て実施していた時期があったが、助成金なしでは経費を捻出できず、実施していない
- ・ 中学・高校から会員校への個別の依頼により実施しているため、専各連としては実施していない
- ・ 県独自で類似イベントを計画、開催しており、このイベントは県と専門学校が一体となって開催している

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

自由回答では、「職業体感型教育」と類似する開催経験からその反省や課題を認識し現状を説明している。やはり人的資金経費全般の負担感は大きいとの認識があり、なかなか継続あるいは拡大の方向にはないことが理解できる。「職業体感型教育」の意義は認めつつもその成果や経費負担から開催は難しいとの認識がうかがえる。

<自由回答>

- ・「出前講座」や「職業体験講座」等は、会員校各校が中学、高校から直接依頼を受けて開催している
- ・中学、高校生や保護者を対象とした「仕事フェスタ」を開催していたが、参加者増が見込めないことや実施内容のマンネリ化、多団体による類似イベントの開催などにより中断している
- ・会員校には個別に対応を要請している
- ・当初、高校生を対象としたイベントを開催していたが、中学生のうちに将来を見据えて進路を決める方向が強くなり、現在、参加は中学校のみになってきている。当会でバスをチャーターして送迎することなどから年々参加希望校が増え、会場のキャパシティから断ることもあるほどの盛況を呈している
- ・以前、大きな会場を借り、中学、高校生を対象に「仕事発見セミナー」を開催し、様々な分野の会員校により職業を体感できる行事を開催していたが、理事校の負担や集客などが課題となり、10年以上実施していない
- ・高校の進路指導教員に対して実施している専門学校視察において、ここ2年ほどは教員向け体験会を開催したところ大変好評をいただいている
- ・公共施設を会場に高校生を対象として、専門学校の学科を理解してもらう「進路ガイダンス」を開催している（高校3校程度が参加、専各連と県の補助）が効果がわからない
- ・以前は専各連独自で会場確保や動員等をしたが、費用の割には高校生の動員が難しく、大変でもあり、現在の高校、中学に向く「出張型」と休日等に専門学校に訪問してもらって体験する「休暇型」というスタイルに変更となった。このスタイルで約10年が経過し、徐々に中学・高校に認知してもらえるようになり、申し込みも年々増えている
- ・H16から「仕事の学び場」として高校生向けの体験講座を開催し、参加者は延べ3千人を超える。H19から3年間は文科省の委託事業として、H20から4年間は県の補助事業として行っていたが、現在は会員校のボランティアと専各連の負担で実施している。体験入学等とは異なり、あくまでも職業教育体験として実施するよう心がけている
- ・会員校では自治体からの要請や広報活動の一環として、小学生から高校生までを対象に出前授業や職業体験講座等を実施しているようだが、具体的実施状況までは把握していない
- ・今年度から中学、高校の各校長会に告知PR活動を実施している
- ・平成29年度まで10回にわたって専各連として行事を開催していたが、動員のバスの経費がかさみ、経費負担が困難となって開催を取りやめた。

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

5 先進的な取り組み事例

5-1 中学生を対象とした職業体感型教育

5-1-1 次世代人材職業体験推進事業（北海道補助事業）

（1）実施状況

北海道内の中学校は、公立 1,038 校、私立 3 校、国立 4 校の計 1,045 校（平成 30 年 5 月 1 日）が開校している。今般の次世代人材職業体験推進事業では、平成 30 年において申込中学校数が 255 校、実に北海道内中学校の 4 校に 1 校が参加している。これは平成 27 年 233 校から始まり令和元年では 274 校に増加している。開講講座数に至っては、平成 27 年の 2,380 講座から令和元年 3,175 講座と 5 年間に約 1.3 倍に講座数が増えている。

申込（受講）生徒数は、平成 27 年 11,889 人から増加傾向にあった。しかし、平成 30 年 9 月 6 日の北海道胆振東部地震の発生とその後の電源消失によるブラックアウトから専門学校は講座の開講が不可能になったことや講座参加を予定していた中学校が受講を辞退したことなどを原因に、平成 30 年は 12,837 人と前年比約 11%低下した。札幌市内中学生は平成 27 年 2,253 人から増加傾向にあったが、北海道胆振東部地震の発生を原因とした停電の影響から申込（受講）生徒数が約 25%と大きく低下した。令和元年には復調に転じ、設定講座数は平成 27 年 255 講座から平成 30 年で 262 講座と 7 講座増やしてはいるが、申込者数は北海道胆振東部地震の影響から減少し令和元年に復調している。予算額は、概ね 4 千万円で推移し、実施講座への負担金充当額も約 39 百万円で推移している。

本事業の評価や満足度は高い水準にあり申込講座数や申込生徒数も一定の水準で維持されている。しかし、講座数の増加は負担金充当額と比例して増加する訳ではなく、むしろ補助金額内でしか執行できないところに問題がある。北海道内の全中学校の 4 校に 1 校が参加している中で、それ以上の参加が補助金額で制約されることは新たに参加を望む中学校の期待に応えられないことになる。次世代人材職業体験は北海道内の全中学、全生徒に広く受講の機会が与えられなければ一部の中学、一部の生徒にしか職業体験の機会が与えられないという不公平な状況に陥る。中学生はほとんどが高校への進学、そして大学への進学や就職の時が想定される中で、職業体験は将来の進路選択において重要な機会であり、何よりも学びの機会として人格形成にも大きな影響を与える。

事業内容の賛否や改善の余地はあるにせよ、職業体験の学びの機会には北海道の全中学、全生徒に公平に与えられるべきである。

図表 ５－１ 次世代人材職業体験推進事業の実施状況

区分	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
I 申込中学校数	233 校	255 校	265 校	255 校	274 校
札幌市内中学校	21 校	22 校	21 校	21 校	23 校
II 申込講座数	2,380 講座	2,914 講座	3,235 講座	3,173 講座	3,175 講座
開催講座数	1,641 講座	1,721 講座	1,696 講座	1,622 講座	1,757 講座
負担金充当講座数	323 講座	318 講座	305 講座	318 講座	322 講座
札幌市内中学校	198 講座	202 講座	245 講座	201 講座	265 講座
III 申込（受講）生徒数	11,889 人	12,348 人	14,399 人	12,837 人	13,461 人
負担金充当生徒数	3,259 人	3,298 人	3,445 人	3,311 人	3,122 人
札幌市内中学生	2,253 人	2,267 人	2,584 人	1,944 人	2,364 人
IV 専修学校参加数	97 校	94 校	91 校	95 校	90 校
V 設定講座数	255 講座	249 講座	254 講座	262 講座	243 講座
VI 予算額	40,201 千円	40,177 千円	40,042 千円	40,019 千円	40,105 千円
補助金額	40,000 千円	40,000 千円	40,000 千円	40,000 千円	40,000 千円
負担金充当額	38,893 千円	38,918 千円	38,827 千円	38,814 千円	38,846 千円

（令和元年度は見込み）

出所：北専各連

（２）実施要領

本事業は、「職業教育の専門機関であり、職業体験施設を保有し、かつ能力開発に関する情報等を豊富に持つ専修学校等が、職業体験の機会に恵まれない中学生に対する『専修学校等を活用した職業体験講座』の開催に対して、負担金を支出することにより支援し、若年層の職業観、勤労観の早期形成を図る」ことを目的としている。

この目的に従えば、北海道内の全中学校、全生徒に職業体験の機会を与えることは不可欠であり、「若年層の職業観、勤労観の早期形成を図る」ことは本事業の根幹をなすものであり、予算額内の実施で講座数や受講人数が制限されることはあってはならない。

また、本事業の効果として、「多様な職業体験の機会により多くの生徒に提供することによって、早期に職業観、勤労観の形成を図り、就職後の早期離職や非正規雇用者の増加防止を図る」ことや「雇用のミスマッチを防ぐことにより、道内企業への定着率を高め、道内企業の競争力の向上を図る」ことをあげている。若年層の早期離職が深刻化している中で、中学校の段階で職業体験の機会を持つことは極めて有益である。

その上で、本事業を推進する予算として、職業体験講座を開催した専修学校等に対して、負担金を支出することになっている。

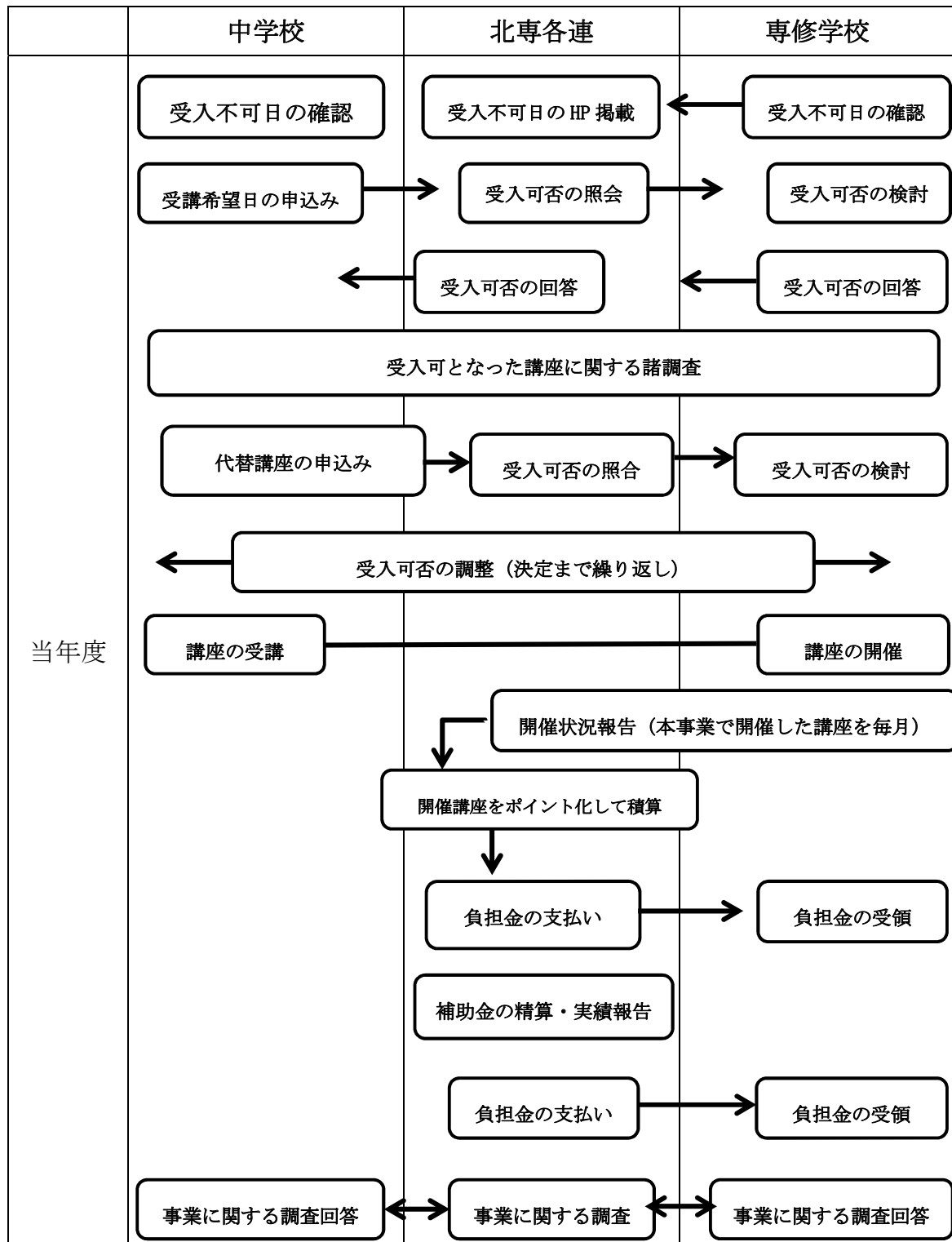
形式的には、専修学校等は毎月末までの職業体験講座の開催状況を「開催状況報告書」に記載し、翌月 5 日までに北専各連に報告し、北専各連は専修学校等が開催した職業体験講座ごとの受講人員に応じて、ポイントを付与する。ポイント付与方法は、「受講者が 5 人未満の職業体験講座 1.0pt」「受講者が 5 人以上 10 人未満の職業体験講座 2.0pt」「受講者が 10 人以上の職業体験講座 3.0pt」に区分され、それに応じてポイントが付与される。そして北専各連は専修学校等に付与したポイントの合計に応じた負担金を支出する。付与例は、以下の表のとおりである。

ポイント合計額	負担金の支出額
10pt	99,000 円
15pt	151,000 円

こうした支援策は、専修学校等の職業体験講座の開講意欲を刺激し、積極的な講座開講数の増加、生徒参加への誘因的取り組み、広報活動等具体的な活動にあらわれる。それが学校間の刺激になり開講講座の質的な向上をもたらすことが期待される。その結果、生徒の「職業観、勤労観の早期形成を図る」ことにつながる。

事業の流れは、中学校や専修学校の年間行事や授業日程等をふまえて中学校と専修学校両校の調整を北専各連が行い、専修学校の受入不可日から中学校の受講希望日を確定し、講座の開講となる。しかし、専修学校の受入可能日と中学校の受講希望日は容易に設定される訳ではなく、決定するまで北専各連の調整作業が続くことになる。また、中学校の受講希望日は他の中学校の年間行事が概ね同一のことから重複するケースが多く受講を断念せざるを得ないことも少なからず発生している。このことから職業体験の受講機会を失うこともあるのである。

図表 5-2 事業の流れ



出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

(3) 職業体験講座アンケート結果（札幌市内・札幌市外中学校 平成 30 年実施）

平成 30 年に実施された札幌市内・札幌市外中学校の職業体験講座のアンケートでは、担当教員の評価では「とてもよかった」札幌市内 10 人 83.3%、札幌市外 89 人 72.4%と札幌市内中学校の担当教員の方が約 10%高い割合であった。もっとも「よかった」札幌市内 2 件 16.7%札幌市外 30 件 24.4%を加えると、札幌市内の担当教員は 100%、札幌市外の担当教員は 96.8%とほぼ全員が高く評価している。

図表 5-3 担当教員の評価

	項目	札幌市内		札幌市外	
		人数	%	人数	%
1	とてもよかった	10	83.3	89	72.4
2	よかった	2	16.7	30	24.4
3	どちらともいえない	0	0.0	1	0.8
4	あまりよくなかった	0	0.0	0	0.0
5	まったくよくなかった	0	0.0	0	0.0
※	無回答	0	0.0	3	2.4
計		12	100.0	123	100.0

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

参加生徒の評価は、「とてもよかった」札幌市内 11 人 91.7%、札幌市外 90 人 73.2%であり、「よかった」札幌市内 1 人 8.3%、札幌市外 31 人 25.2%を加えると、札幌市内 100%、札幌市外 98.4%と高い割合をしめしている。「とてもよかった」と「よかった」の回答の判断基準がどこにあるのか判然としないが、いずれにしても「よかった」と思った生徒はほぼ全員といえる。

図表 5-4 参加生徒の評価

	項目	札幌市内		札幌市外	
		人数	%	人数	%
1	とてもよかった	11	91.7	90	73.2
2	よかった	1	8.3	31	25.2
3	どちらともいえない	0	0.0	0	0.0
4	あまりよくなかった	0	0.0	0	0.0
5	まったくよくなかった	0	0.0	0	0.0
※	無回答	0	0.0	2	1.6
計		12	100.0	123	100.0

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

次年度に講座利用したいとの意欲は、「ぜひ利用したい」札幌市内 10 人 83.3%、札幌市外 87 人 70.7%であり、「できれば利用したい」札幌市内 2 人 16.7%、札幌市外 34 人 27.6%で「利用したい」との意欲は札幌市内で 12 人 100%、札幌市外で 121 人 98.3%に達する。今年度の講座利用と参加、その成果に対する満足度の高さがうかがえる。

図表 5-5 次年度の講座利用意欲

	項目	札幌市内		札幌市外	
		人数	%	人数	%
1	ぜひ利用したい	10	83.3	87	70.7
2	できれば利用したい	2	16.7	34	27.6
3	あまり利用したくない	0	0.0	0	0.0
4	利用しない	0	0.0	0	0.0
※	無回答	0	0.0	2	1.6
計		12	100.0	123	100.0

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

意見・要望としては、札幌市外の学校から高い評価と満足の意見がある一方で、参加する上で問題となることが具体的に示されている。時間や場所、専門学校側の対応など参加した学校ならではの問題意識を確認できる中で、申込み内容と実際の講座が明らかに異なるようなケースもあり手続きのあり方を再検討すべきことも指摘されている。

- ・中学生の段階において、自己の進路を考えるうえで大変有益な講座です。
- ・中学生が札幌で体験講座に参加する場合、地元でない限り多くは修学旅行の自主研修などで行われる。持参できるものに限りがあるため、上靴やエプロンなどもレンタルさせていただける学校はありがたかった。また、駅周辺や地下鉄ですくに行けるところは人気がある。
- ・今回、他校生徒の影響(遅刻、私語、態度)で予定されていた活動ができなかったと報告があった。他校とのブッキングは仕方のないことだと思っているが、あまりに目に余る様子があるようなら退出を願うことはできないだろうか。
- ・申し込んだ講座のうち、ひとつだけ打ち合わせと全く違う内容の所があり、生徒にとっても事前学習をして臨んだのに残念なことになってしまいました。体験ということでしたが、ほぼ施設見学と学校の説明だったというものです。

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

(4) 「職業体感型教育」受講後の「事後学習」

「職業体感型教育」を受講した生徒は、単に受講したという経験に終わるのではなく受講した内容を深耕する場を「事後学習」として開催している。北見市立常呂中学校では、自分の目で見えて考え受け止めたことを参加生徒間で議論し自分自身の経験に止めることなく周囲と共有し、さらに発表の機会を得て学習成果に結び付けている。これは生徒の自主性を刺激し「職業体感型教育」を「学びの場」として生徒が受け入れていることの証左といえる。



出所：北見市立常呂中学校提供

5-1-2 進路探究学習オリエンテーリング事業（札幌市教育委員会委託事業）

（１）実施状況

進路探究学習オリエンテーション事業は、目的として「子どもが自立した社会人へと成長していくためには、子ども一人一人が、将来の生き方や進路についてよく考えるとともに、体験を通して働くことの意義を感じ取り、コミュニケーション能力や課題解決能力など社会人として必要とされる知識や技能等を身に付けようとする意欲を高めるなど、発達段階を踏まえ、系統的、計画的な進路探究学習プログラムを確立していくことが必要である。現在、中学校で行なわれている職場体験については、衛生上や安全上の理由等により、見学や単純作業で終わってしまうなど、その目的が達成できないことがあることから、実際に仕事を体験できる専門的な施設、設備での職場体験を行うこととし、『進路探究学習』の一層の充実を図る」ことを掲示している。

事業内容は、「職業教育の専門機関であり、職業体験施設を保有し、かつ能力開発に関する情報等を豊富にもつ専修学校・各種学校と連携し、中学校・中等教育学校の夏季休業期間中に、札幌市内及び近郊の専修学校等を会場とした職業体験講座を実施」することである。対象者は、札幌市立中学校・中等教育学校の１・２年生である。

札幌支部専門学校数は、平成 27 年度の 85 校から令和元年度 79 校にかけてやや減少傾向にある。参加専門学校数は平成 27 年度の 53 校を最低に平成 30 年度 60 校を最高とし概ね 50 校以上で推移している。提供講座数は、平成 27 年度の 72 講座から令和元年 104 講座に大幅に増加しているが、実施講座数は平成 29 年度の 65 講座を最小に令和元年 83 講座にとどまっている。

対象生徒数は中学 1 年生と未参加の中学 2 年生で、平成 27 年度 15,025 人、以降、14 千人台に低下するものの令和元年度は対象を中学 1・2 年生にしたところ 28,696 人に大幅に増加している。対象中学校数は平成 27 年度 98 校から平成 28 年度以降 100 校で推移している。受講者数は、平成 30 年度の 756 人を除いて増加傾向にあり令和元年度は 1,083 人に達している。保護者の参加は平成 30 年度の参加生徒の減少とともに 433 人に低下したが、平成 27 年度から受講者数の増加とともに保護者の参加も増加傾向にある。

委託費は平成 27 年度から平成 29 年度まで同額の 7,236,000 円であったが、平成 30 年度に約 30 万円増加し令和元年度には 9,401,720 円に 200 万円以上増加している。予定講座増加に合わせて予算額も増額されている。

図表 5－6 「職業体験講座」実施状況（5年間）

区分		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
札幌支部専門学校数		85校	84校	83校	80校	79校
1校当たりの登録数		2講座	2講座以内	2講座以内	2講座以内	3講座以内
参加専門学校数		53校	55校	59校	60校	57校
実施専門学校数		53校	48校	46校	51校	50校
講座数	提供講座数	72講座	75講座	86講座	86講座	104講座
	登録コース数	75コース	78コース	90コース	90コース	107コース
	実施講座数	72講座	64講座	69講座	67講座	83講座
	実施コース数	75コース	67コース	69コース	71コース	86コース
対象生徒 (H30まで中学1年生数)		15,025人	14,699人	14,873人	14,145人	28,696人
対象者		中学1年生と 未参加の2年生	中学1年生と 未参加の2年生	中学1年生と 未参加の2年生	中学1年生と 未参加の2年生	中学 1・2年生
対象中学 校数	学校数	98校	100校	100校	100校	100校
	参加校数	85校	92校	97校	96校	95校
中学校 生徒数	申込者数	1,005人	1,093人	1,255人	894人	1,288人
	受講決定者数	953人	1,020人	1,169人	884人	1,252人
	参加者数	791人	872人	1,014人	756人	1,083人
保護者数	参加予定者数	368人	514人	541人	433人	559人
	参加者数	—	427人	452人	350人	463人
委託費	委託費総額	7,236,000円	7,236,000円	7,236,000円	7,560,000円	9,401,720円
	1講座あたり	76,000円	76,000円	76,000円	76,000円	76,000円
	予定講座数	60講座	60講座以上	60講座以上	68講座以上	83講座以上

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

（２）生徒及び保護者アンケート結果

生徒アンケートの結果は、「今回の職業体験に参加して良かった」では「そう思う」が90.6%、「大体そう思う」9.0%を加えると99.6%が「良かった」との回答である。

「働きたいとの気持ちが前よりも強くなった」では、「そう思う」が62.7%、「大体そう思う」30.1%で、合わせて93.8%で高い割合を示している。

「将来の夢や目標について考えた」では、「そう思う」が56.8%、「大体そう思う」35.1%で、合わせて91.9%と「思う」割合が90%以上の水準である。

「将来の夢に向けて、何をしたらよいのかを考えた」では、「そう思う」が44.2%、「大体そう思う」43.2%で同水準にあるが、合わせると87.4%と高い割合を示している。将来の夢が漠然としていることもあって強く「そう思う」とは断定できない事情が推察される。

「学校の学習と、仕事のつながりを感じた」では、「そう思う」が45.0%、「大体そう思う」37.5%と続き、「あまりそう思わない」10.4%、「そう思わない」1.8%と合わせて12.2%の水準であり、「わからない」5.4%と「学習と仕事のつながり」への戸惑いのようなことが考えられる。

「難しいことでも失敗を恐れず、挑戦することが大事だと思った」では、「そう思う」が66.7%、「大体そう思う」27.6%で、合わせると94.3%と高い割合を示している。職業体験の場で「うまくいかなかった」ことが念頭にある回答だと思われる。

「自分にはよいところがあると思った」では、「大体そう思う」40.2%が最も高く、次に「そう思う」が24.1%で、「あまりそう思わない」が19.2%、「そう思わない」4.4%で「自分のよいところ」の発見には至っていないことや「わからない」12.1%と比較的高い割合になっていることから「自分のよいところ」の自覚が足りないものといえる。

「このような体験は小学校の時から必要だと思った」では、「そう思う」が55.1%、「大体そう思う」30.3%で、合わせて85.4%と高い割合を示す一方で、「あまりそう思わない」8.6%、「そう思わない」1.5%、合わせて10.1%あり、小学生には職業体験はやや難しいとの印象があるものと推察される。

「機会があれば、他の体験もしてみたいと思った」では、「そう思う」が76.8%、「大体そう思う」16.9%で、合わせて93.7%と高い割合にあることから職業体験の満足度の高さがうかがえる。

図表 ５－７ 参加生徒のアンケート結果

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	わからない
1. 今回の職業体験に参加して良かった	90.6%	9.0%	0.2%	0.1%	0.1%
2. 将来、働きたいという気持ちが前よりも強くなった	62.7%	30.1%	4.4%	0.7%	2.2%
3. 将来の夢や目標について考えた	56.8%	35.1%	4.5%	1.4%	2.2%
4. 将来の夢に向けて、何をしたらよいのか考えた	44.2%	43.2%	7.8%	1.5%	3.2%
5. 学校の学習と、仕事のつながりを感じた	45.0%	37.5%	10.4%	1.8%	5.4%
6. 難しいことでも失敗を恐れず、挑戦することが大事だと思った	66.7%	27.6%	3.3%	0.3%	2.1%
7. 自分にはよいところがあると思った	24.1%	40.2%	19.2%	4.4%	12.1%
8. このような体験は小学校の時から必要だと思った	55.1%	30.3%	8.6%	1.5%	4.5%
9. 機会があれば、他の体験もしてみたいと思った	76.8%	16.9%	3.4%	1.2%	1.8%

出所：札幌市教育委員会（2019）『進路探究学習 報告書』をもとに筆者作成

生徒の自由記述は、第一位「楽しかった・面白かった・嬉しかった」で 349 人 46.2%であった。第二位は「良かった・良い体験になった」で 191 人 25.3%である。第三位は「ありがとうございました」で 171 人 22.6%である。第四位は「また参加したい・違う体験もしたい」98 人 13.0%、そして第五位は「よく分かった・分かりやすかった・理解できた」で 89 人 11.8%であった。職業体験参加の高い満足度、良い経験、感謝がうかがえる。

保護者のアンケートは、「職業体験に参加させて良かった」では「そう思う」が83.6%、「大体そう思う」15.6%で、合わせると98.6%と高い割合になっている。

「将来のことを考えるきっかけになった」では、「そう思う」が60.9%、「大体そう思う」32.4%で、合わせると93.3%と高い割合になっている。

「学校の学習と、仕事のつながりを感じた」では、「そう思う」が47.7%、「大体そう思う」35.3%で、合わせると83.0%と高い割合を示すものの「あまりそう思わない」12.1%「そう思わない」1.0%が合わせて13.1%と一定の水準にある。学校の学習内容と仕事のつながりは「あまりない」との認識が推察される。

「難しいことでも失敗を恐れず、挑戦することが大事だと思った」では、「そう思う」が66.9%、「大体そう思う」26.9%で、合わせると93.8%と高い割合を示している。

「このような体験は小学校の時から必要だと思った」では、「そう思う」が50.8%、「大体そう思う」31.1%で、「あまりそう思わない」13.9%と小学生は「まだはやい」との認識が推察される。

「機会があれば、他の体験もさせてみたいと思った」では、「そう思う」が85.4%、「大体そう思う」13.4%で、合わせると98.8%と高い割合を示している。就業体験への満足度、評価の高さがうかがえる。

自由意見の上位は、第一位「ありがとうございました・感謝します」142人49.8%で就業体験への感謝が最も高い割合にある。第二位「良かった・良い体験だった・良い機会になった」92人32.3%、第三位「楽しそうだった・見学者も楽しめた・おもしろかった」70人24.6%、第四位「貴重な経験をさせてもらった・有意義だった」29人10.2%、第五位「将来について考えるきっかけになったと思う」25人8.8%の順である。生徒である子息を親目線で見たと「子どもがおもっている」ことを代弁したような結果になっている。「専門学校のことが分かった・専門学校に興味をもった」とする回答が8人2.8%に過ぎないことは就業体験の意義を理解していないのではないかという疑念も生じる。「将来について考えるきっかけ」との認識は歓迎したいが、家庭内ではこの就業体験とは別に将来の仕事や就職先のことをあまり考えてはいないのではないかと推察される。進路の相談相手が「母親」や「両親」である親族であることを考えれば保護者がもっとしっかり考え子息と向き合うことが必要と思われる。

図表 ５－８ 保護者のアンケート結果

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	わからない
1. 職業体験に参加させて良かった	83.0%	15.6%	1.0%	0.2%	0.2%
2. 将来のことを考えるきっかけになった	60.9%	32.4%	3.1%	0.5%	3.1%
3. 学校の学習と、仕事のつながりを感じた	47.7%	35.3%	12.1%	1.0%	4.0%
4. 難しいことでも失敗を恐れず、挑戦することが大事だと思った	66.9%	26.9%	4.2%	0.3%	1.7%
5. このような体験は小学校の時から必要だと思った	50.8%	31.1%	13.9%	0.0%	4.2%
6. 機会があれば、他の体験もさせてみたいと思った	85.4%	13.4%	0.7%	0.0%	0.5%

出所：札幌市教育委員会（2019）『進路探究学習 報告書』をもとに筆者作成

（３）参加学校及び生徒、保護者からの声

職業体験が終了した後、参加学校の校長、担当教諭、生徒そして保護者から多数のお礼状が届いている。以下に全お礼状の一部とお礼状の中には長文のものもあるため抜粋して掲載した。

内容は、職業体験に参加したお礼がほとんどであるが、その共通するところは将来の職業選択や就職において考える機会になったことや動機づけ、生徒に至っては実際の就業に関われたことの感動や仕事の新たな発見など通常の授業には無い体験ができたことに対する感動がつづられている。また、こうした体験を授業内で再検討することや発表の機会をつくるなど生徒の職業意識をさらに高める取り組みや工夫が見られることである。職業体験を一過性のイベントにするのではなく学習の機会として再活用することは極めて重要である。

こうしたお礼状は、専門学校、教職員などにとって今後の活動意欲を高めるものであり職業体験講座の質的向上をもたらすものとして歓迎すべきことである。

①千歳市立中学校 校長

「憧れの職業に就くための道筋を知るだけでなく、実際に行なわれている授業や実習を体験させていただいたことは、子どもたちにとって大変貴重な経験となりました。子どもたちの感想などからも、多くのことを体得できたものと確信しております。これも、ひとえにご協力をいただいた皆様のおかげと、心より感謝申し上げます。

現在、本校では、今週行なわれる発表会に向け、「職業体験」学習のまとめに取り組んでおります。子どもたちがお互いの体験を交流しあうことにより、いろいろな職業や仕事があることを知り、自分の将来を見つめることができるような発表会にしたいと考えております。

②札幌市内中学校 校長

生徒たちは日常の学校生活では得ることのできない経験を通して、将来の職業および自分たちの進路についての学習を深めることができました。

③釧路市立中学校 校長

生徒は体験を通して、社会には様々な職業があることを実感し、自己の将来や進学イメージを膨らませることができたようです。— 略 —

今後は、生徒・教師一同でこの成果を分かち合い、子供たちの進路実現に向けてさらに努力していきたいと考えております。

④札幌市内中学校 教諭

事後学習として、子どもたち1人1人が、まとめレポートを書きました。A4用紙の上半分に思い思いのイラストを描き、下段には作文を書きました。その後、訪問先学校毎に集まって、発表会を行い、学年集会で発表する代表者を決めました。どの子も自分が勉強になったことや感じたことなど自分の言葉で発表しました。— 略 — 全員のまとめレポートは本校廊下の掲示板にはって、学年の子どもたちが自由に読めるようにして交流しています。この後、懇談で来校された保護者の皆様にも見ていただく予定です。

⑤中標津町立中学校 教諭

先日は本校の修学旅行での学校訪問に多大なるご協力をいただきまして誠にありがとうございました。— 略 — お蔭さまで生徒たちは中標津では味わうことができない、充実した素晴らしい経験をすることができました。— 略 —

修学旅行を終え、学校に戻ってきた生徒たちは、旅行中の出来事や学校訪問での体験を夢中で語り合っております。3年生にとって残りわずかの中学校生活に張り合いを持ち、自分の進路について真剣に考えるよい機会にもなったようです。

⑥札幌市内中学校 生徒

今回の学習は、幼い頃からの夢である美容師に近づけるという絶好の機会でもとても興奮していました。自分がやっていた髪のカット方やハサミの使い方から持ち方も楽しく分かりやすく教えて頂き、今までより一層美容師になりたいという思いが深まりました。本当にありがとうございました。

⑦中標津町立中学校 生徒

今回の学習で一番印象に残ったことはヘアアレンジ体験です。今までできなかったあみこみを優しく教えてもらい、実際にできるようになって、とても嬉しかったです。

今回の体験を機に自分の目標を見つめなおし、将来の進路について真剣に考えていきたいと思います。この度はたいへんありがとうございました。

⑧釧路市立中学校 生徒

今回の授業を体験し、お客さんのご要望の髪型にする難しさを学びました。また、ヘアカットをした時に髪をきれいにそろえてきることができた時の喜びと達成感を感じました。とても貴重な体験ができたと思います。

今回の体験学習をして、今後の自分の進路実現に向けて努力していきたいと思います。

⑨釧路町立中学校 生徒

私の中での将来の夢はまだ決まっていなかったのですが、訪問する前までは私の中では人に何かを届ける、人のために何かをしたいという思い、人と接客することがしたいと思

っていました。美容の中でも世界は広くとても興味があり、この機会を通して、この美容専門学校に行くことができとても嬉しい限りです。― 略 ―

今回の貴校への訪問は進学先を決定するうえでとても参考となるものになりました。また、将来に向けて家族の人と話しをし、― 略 ― 将来の目標に向け、今の自分には何をすべきかを学ぶことができたと思います。

⑩保護者

教わった用語なども覚え、家でも色々と調べ、自主的に学習にはげんでいます。この度の学びを将来や進路決定の際にもいかしていきたいと思います。

※お礼状の内容を尊重し原文のまま記載した。

５－２ 高校生を対象とした職業体感型教育

5-2-1 専門学校等進路相談会

「2019 専門学校等進路相談会」は、北海道高等学校・専修学校連絡協議会及び北専各連により開催されている。参加生徒の質問や確認内容では、「入学条件、試験」が 19.2%と昨年（19.0%）と同水準で最も高い割合であった。次に「学科内容、授業内容」が 17.2%で昨年（14.4%）より約 3 %上昇している。「入学金・学費」は 13.5%で昨年（15.5%）より 2%低下している。

一方、「求人状況、就職実績」は 7.5%で昨年（6.5%）より 1%上昇してはいるものの決して高い水準ではない。これは、相談会参加する以前に専門学校毎の就職実績を確認していることやテレビ・新聞報道などで現在の求人状況が人手不足もあり「売り手市場」になっていることから生徒・学生側が有利との情報をもっていることが考えられる。

図表 ５－９ 専門学校等進路相談会における質問・確認内容

開催月日	3/19	3/20	4/22	4/24	5/8	合計	回答率	回答率 (昨年)
会場	北見	釧路	瀧川	函館	稚内			
入学条件、試験	36	73	65	27	28	229	19.2%	19.0%
求人状況、就職実績	18	25	26	9	11	89	7.5%	6.5%
学校の特色、進学方法や学生生活	18	52	22	7	22	121	10.2%	10.9%
学科内容、授業内容	41	71	42	23	28	205	17.2%	14.4%
入学金、学費	26	45	43	24	23	161	13.5%	15.5%
資格実績	17	24	15	10	11	77	6.5%	7.7%
アパート、下宿、寮	12	14	16	3	14	59	5.0%	5.2%
施設、設備	12	20	16	7	14	69	5.8%	6.2%
奨学金、特待生制度	11	33	26	16	11	97	8.2%	8.8%
大学、短大併願制度	0	7	1	1	1	10	0.8%	0.6%
研修、編入制度	1	0	1	0	0	2	0.2%	0.3%
その他	3	5	0	0	2	10	0.8%	0.4%
無回答	17	12	23	2	7	61	5.1%	4.6%
計	212	381	296	129	172	172	100.0%	100.0%

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

5-2-2 高等学校内キャリア教育プログラム

(1) キャリア教育プログラムの概要

キャリア教育プログラムは、「専門学校講話」「職業・職種講話」「体験型授業」「校内進学相談会」の4プログラムで構成している。

「専門学校講話」では、授業内容や職業と資格取得、就職の状況等について解説している（1講座 50分程度）。その内容は、①専門学校の特徴（授業内容、認可・無認可の違い等）、②大学等との相違。③職業と資格取得の関係、④就職の状況、⑤企業が求める人材、⑥入学制度、学費、奨学金制度など専門学校の基本的事項である。

「職業・職種講話」では、特定の職業・職種について仕事内容や魅力、必要な資格などの説明である（原則として1講座 50分、10講座まで）。

「体験型授業」では、特定の職業に従事するために必要な知識や技術等に関して専門学校が行っている授業を提供することである。中学生や高校生に対し職業の内容をふまえ、それに必要な知識や技術を習得できる内容になっている。

「校内進学相談会」は、各専門学校の教育内容や特色、入学試験制度、学費などの相談説明会である。

図表 5-10 キャリア教育プログラムの区分・内容

	区分	内容	メリット
専門学校講話	専門学校の授業内容などの特徴や職業と資格取得の関係、就職の状況等について、詳細な情報を提供します。 (1講座 50分程度)	①専門学校の特徴（授業内容、認可・無認可の違い等） ②大学等との相違 ③職業と資格取得の関係 ④就職の状況 ⑤企業が求める人材 ⑥入学制度、学費、奨学金制度 など	①各学年・各学科のニーズに合わせた、様々な職業・職種を知ることができます。 ②高校生の多様な就業ニーズに合わせて説明を受けることができます。
職業・	特定の職業・職種について仕事内容や魅力、必要な資格などを具体的に説明し	職業分野の個別の職業・職種について、具体的な仕事内容やその魅力、必要な資	③この講話を通して、具体的な目標を持って勉学に

職 種 講 話	ます。 (原則として1講座50分、 10講座まで)	格就職状況などを詳しく 説明します。	励むことができます。
体 験 型 授 業	特定の職業に従事するた めに必要な知識や技術等 に関し、専門学校が行って いる授業を提供します。	専門学校の教えている講 義型授業、実習形授業を提 供します。 (ホームページHSUを参照 してください。)	①専門学校で修得する技 術を具体的に学ぶことで、 多様なキャリアを知ること ができます。 ②体験型授業を通して、職 業・職種に興味を持ち、更 に勉学に励むことができ ます。
校 内 進 学 相 談 会	体育館などにおいて、専門 学校毎の個別ブースを設 け、生徒の希望にそって専 門学校の概要を説明しま す。	各専門学校の教育内容、特 色、入学試験制度、学費な どについて説明いたしま す。	①総合的な学習の時間の 中で専門学校を知る機会 を得ることができます。 ②他施設（公民館やホテル）への移動する必要があ りません。

出所：北専各連提供資料（2019年版）から抜粋

(2) キャリア教育プログラム開催実績(平成30年度)

①職業・職種講話

職業・職種講話は、9月と1月を除いて5月から3月まで毎月開催している。16校の参加により183講座、2,892人の生徒が参加している。

図表 5-11 職業・職種講話実績

月	日	学校名	講座数	生徒数	月	日	学校名	講座数	生徒数
5	8	苫前商業高等学校	10	54	12	5	美幌高等学校	9	183
5	9	千歳北陽高等学校	15	412	12	5	網走南ヶ丘高等学校定時制	4	34
6	20	岩見沢東高等学校定時制	5	22	12	5	苫小牧西高等学校	18	298
7	24	遠軽高等学校	15	563	12	7	津別高等学校	8	130
7	24	小樽未来創造高等学校定時制	3	32	12	12	苫小牧西高等学校	18	318
8	24	訓子府高等学校	11	124	2	8	伊達高等学校	11	136
10	3	湧別高等学校	10	76	2	14	札幌白陵高等学校	4	43
10	24	東川高等学校	10	136	3	12	名寄産業高等学校	17	200
11	2	倶知安高等学校	15	131	計		16	183	2,892

出所：北専各連提供資料から抜粋

②専門学校講話

専門学校講話は、4月2回、6月7月11月2月3月各1回開催し、7校、7講座、309人の生徒が参加している。富川高等学校と札幌英藍高等学校は保護者も参加している。

図表 5-12 専門学校講話実績

月	日	学校名	講座数	生徒数	月	日	学校名	講座数	生徒数
4	21	富川高等学校 (保護者)	1	7	11	8	北広島西高等学校	1	97
4	24	旭川藤女子高等学校	1	51	2	5	札幌平岡高等学校	1	50
6	8	長万部高等学校	1	7	3	19	根室高等学校	1	90
7	3	札幌英藍高等学校 (保護者)	1	7	計		7	7	309

出所：北専各連提供資料から抜粋

③体験型授業

体験型授業は、5月から翌年3月まで毎月実施されている。札幌市内近郊の開催回数がやや多いが、北海道内の道東、道北を中心に全域にわたり開催している。開催校 24 校、150 講座、2,389 人の生徒が参加している。

図表 5－13 体験型授業実績

月	日	学校名	講座数	生徒数	月	日	学校名	講座数	生徒数
5	18	日高高等学校	2	21	10	30	本別高等学校	1	14
6	8	月形高等学校	8	155	11	7	札幌啓北商業高等学校	10	293
6	20	上富良野高等学校	7	57	11	8	双葉高等学校	1	15
6	20	弟子屈高等学校	5	27	11	12	苫前商業高等学校	1	4
7	12	双葉高等学校	1	16	11	14	天塩高等学校	4	56
7	19	双葉高等学校	1	16	11	14	札幌西陵高等学校	3	77
7	20	檜山北高等学校	12	364	11	16	南幌高等学校	7	37
7	23	利尻高等学校	1	8	12	4	札幌月寒高等学校 定時制	6	87
8	23	双葉高等学校	1	16	12	13	伊達・虻田高等学校	15	222
9	12	留萌高等学校	6	196	12	13	双葉高等学校	3	56
9	13	双葉高等学校	1	15	1	24	双葉高等学校	2	31
9	18	倶知安高等学校	12	98	1	26	美深高等学校	1	11
9	21	訓子府高等学校	7	118	1	31	双葉高等学校	1	16
10	18	釧路湖陵高等学校 定時制	6	28	2	14	双葉高等学校	1	16
10	22	岩見沢東高等学校 定時制	3	20	3	8	石狩翔陽高等学校	5	95
10	22	岩内高等学校	11	120	3	15	厚真高等学校	6	42
10	26	日高高等学校	4	42	計		24	150	2,389

出所：北専各連提供資料から抜粋

④校内進学相談会

校内進学相談会は、江差高等学校で 25 講座、13 人の生徒が参加している。別海高等学校では、40 講座、218 人の生徒が参加している。合計、65 講座、231 人の参加である。

図表 5－14 校内進学相談会実績

月	日	学校名	講座数	生徒数	月	日	学校名	講座数	生徒数
4	26	江差高等学校	25	13	11	22	別海高等学校	40	218
					計			65	231

出所：北専各連提供資料から抜粋

(3) 「職業・職種講話」「体験型授業」参加者のアンケート結果

①「職業・職種講話」参加者のアンケート結果

「職業・職種講話」では、「保育・介護福祉」が 351 人 13.6%で最も多く、次いで「公務員ビジネス」が 287 人 11.1%、「医療」283 人 11.0%と続いている。「看護」15 人 0.6%を除いて、保育・公務員・医療への人気が高いものといえる。

図表 ５－１５ 職業・職種講話受講者の希望分野

	職業・職種講話	1 回目	2 回目	合計	%
1	保育・介護福祉	194	157	351	13.6%
2	公務員ビジネス	183	104	287	11.1%
3	医療	123	160	283	11.0%
4	パソコン・CG・ゲーム	101	117	218	8.4%
5	工業	105	94	199	7.7%
6	理容美容	98	72	170	6.6%
7	調理製菓	82	84	166	6.4%
8	ホテル観光	92	70	162	6.3%
9	デザイン	64	72	136	5.3%
10	スポーツ	53	69	122	4.7%
11	動物	53	50	103	4.0%
12	音楽放送芸術	40	32	72	2.8%
13	ファッション	20	42	62	2.4%
14	農業	19	12	31	1.2%
15	大学・短大	26	0	26	1.0%
16	看護	0	15	15	0.6%
17	民間就職	1	12	13	0.5%
18	未記入	86	78	164	6.4%
	合計	1,340	1,240	2,580	100.0%

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

②「体験型授業」参加者のアンケート結果

体験型授業受講者では、「公務員ビジネス」が最も高い割合にあり 366 人 14.8%の割合である。次に、「医療」308 人 12.5%、「調理製菓」285 人 11.6%と続き、「理容美容」246 人 10.0%で上位 4 分野になる。上位 4 分野で参加人数 2,466 人のうち約半数 1,205 人を占めている。

図表 5-16 体験型授業受講者の希望分野

	体験型授業	1回目	2回目	合計	%
1	公務員ビジネス	221	145	366	14.8%
2	医療	212	96	308	12.5%
3	調理製菓	183	102	285	11.6%
4	理容美容	158	88	246	10.0%
5	パソコン・CG・ゲーム	122	72	194	7.9%
6	保育・介護福祉	124	69	193	7.8%
7	デザイン	109	59	168	6.8%
8	スポーツ	78	60	138	5.6%
9	工業	88	44	132	5.4%
10	動物	53	51	104	4.2%
11	音楽放送芸術	37	23	60	2.4%
12	ホテル観光	16	18	34	1.4%
13	ファッション	16	8	24	1.0%
14	農業	8	16	24	1.0%
15	大学	0	6	6	0.2%
16	未記入	123	61	184	7.5%
	合計	1,548	918	2,466	100.0%

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

③「なりたい職業」を決めるポイント

「なりたい職業」の決定ポイントは、「やりがい」1,384人20.0%で同水準に「仕事の楽しさ」1,321人19.1%、第3番目に「安定性」1,104人16.0%、第4番目に「夢」1,043人15.1%で、4,852人で全体の約70%を占めている。

図表 ５－１７ 受講者の職業決定ポイント

	ポイント	人数	%
1	やりがい	1,384	20.0%
2	仕事の楽しさ	1,321	19.1%
3	安定性	1,104	16.0%
4	夢	1,043	15.1%
5	給料の高さ	718	10.4%
6	将来性	656	9.5%
7	かっこよさ	404	5.8%
8	その他	127	1.8%
9	未記入	152	2.2%
	合計	6,909	100.0%

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

④進学選定先の決定ポイント

進学選定先の決定ポイントは、「学費」1,273 人 19.6%、「就職実績」1,253 人 19.3%、「資格取得実績」1,230 人 18.9%、「学校の所在地」1,071 人 16.5%の順である。学費の負担と学校の所在地は交通費や仕送りなどの経済的負担を考慮していることがうかがえる。一方で、「就職実績」や「資格取得実績」は将来の就職を見据えていることと自己の能力評価を高める手段、業務担当能力など将来担当する仕事を意識していることが理解できる。以上 4 項目の合計 4,827 人は全体の約 74%に達する。

図表 ５－１８ 受講者の進学選定先決定ポイント

	ポイント	人数	%
1	学費	1, 273	19. 6%
2	就職実績	1, 253	19. 3%
3	資格取得実績	1, 230	18. 9%
4	学校の所在地	1, 071	16. 5%
5	知名度	418	6. 4%
6	両親の薦め	297	4. 6%
7	部活やサークル活動	246	3. 8%
8	先生の薦め	212	3. 3%
9	その他	117	1. 8%
10	友達の進路選択	68	1. 0%
11	未記入	309	4. 8%
	合計	6, 494	100. 0%

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

⑤受講の参考感

受講者の「参考になった」では、職業・職種講話 1, 190 人 88. 8%、体験型授業 1, 386 人 89. 5%であり、高い割合を示している。

図表 ５－１９ 受講者の参考感

		参考になった	どちらとも いえない	参考に ならなかった	未記入
職業・職種講話	人数	1, 190 人	84 人	4 人	62 人
	%	88. 8%	6. 3%	0. 3%	5. 0%
体験型授業	人数	1, 386 人	111 人	11 人	40 人
	%	89. 5%	7. 2%	0. 7%	2. 6%

出所：北専各連提供資料をもとに筆者作成

5-2-3 キャリアサポートセミナー（北海道教育委員会主催事業）

（１）実施会場

令和元年度の実施会場は、日高会場（Ｒ元. 8.19 静内農業高等学校 1・2年生ほか）、後志会場（Ｒ元. 9. 9 倶知安農業高校 1・2年生ほか）、釧路会場（Ｒ元. 9.13 標茶高校 1・2年生ほか）、根室会場（Ｒ元. 9.20 別海高校 1・2年生ほか）の４会場で実施している。

各会場の延べ参加人数は、日高会場 214 人、後志会場 91 人、釧路会場 107 人、根室会場 199 人で合計 611 人に及んでいる。

開催した講座名及び担当した専門学校は、図表 ５－２０の通りである。

図表 ５－２０ 会場ごとの講座名、専門学校、延べ受講者数

①日高会場（Ｒ元. 8.19 静内農業高等学校 1・2年生ほか）

講座名	担当専門学校	延べ受講者数
①自動車整備士の仕事	日本工学院北海道専門学校	28
②ヘア＆メイク体験	北海道美容専門学校	30
③保育士・幼稚園教諭のお仕事	経専北海道保育専門学校	25
④公務員職業ガイド	大原法律公務員専門学校	21
⑤音楽業界まるわかりセミナー	札幌放送芸術＆ミュージック・ダンス専門学校	28
⑥デザインを仕事にしよう	専門学校札幌デザイナー学院	25
⑦スポーツトレーナーの仕事とは	北海道スポーツ専門学校	19
⑧動物看護師体験	愛犬美容看護専門学校	38
延べ受講者計		214

②後志会場（Ｒ元. 9. 9 倶知安農業高校 1・2年生ほか）

講座名	担当専門学校	延べ受講者数
①自動車整備士の仕事	専門学校北海道自動車整備大学校	7
②ヘア＆メイク体験	北海道理容美容専門学校	10
③保育士・幼稚園教諭のお仕事	せいとく介護こども福祉専門学校	4
④公務員職業ガイド	日本工学院北海道専門学校	12
⑤音楽業界まるわかりセミナー	経専音楽放送芸術専門学校	18
⑥デザインを仕事にしよう	専門学校札幌デザイナー学院	20
⑦スポーツトレーナーの仕事とは	北海道メディカルスポーツ専門学校	11
⑧動物看護師体験	エス・ワン動物専門学校	9
延べ受講者計		91

③釧路会場（R 元. 9. 13 標茶高校 1・2 年生ほか）

講座名	担当専門学校	延べ受講者数
①自動車整備士の仕事	札幌科学技術専門学校	1 9
②ヘア&メイク体験	釧路理容美容専門学校	7
③介護福祉士の仕事を理解する	くしろせんもん学校	1 5
④公務員職業ガイド	吉田学園情報ビジネス専門学校	2 3
⑤ホテルのお仕事体験セミナー	経専北海道観光専門学校	1 1
⑥音楽業界まるわかりセミナー	専門学校札幌ビジュアルアーツ	8
⑦デザインを仕事にしよう	専門学校札幌デザイナー学院	1 4
⑧動物看護師体験	北海道エコ・動物自然専門学校	1 7
延べ受講者計		1 0 7

④根室会場（R 元. 9. 20 別海高校 1・2 年生ほか）

講座名	担当専門学校	延べ受講者数
①リハビリのお仕事	札幌医学技術福祉歯科専門学校	2 4
②保育士・幼稚園教諭の仕事	くしろせんもん学校	2 2
③公務員職業ガイド	吉田学園情報ビジネス専門学校	4 2
④医療事務のお仕事を体験しよう	北見情報ビジネス専門学校	1 9
⑤音楽業界まるわかりセミナー	経専音楽放送芸術専門学校	1 3
⑥デザインを仕事にしよう	専門学校札幌デザイナー学院	1 6
⑦スポーツトレーナーの仕事とは	札幌スポーツアンドメディカル専門学校	3 1
⑧動物看護師体験	経専北海道どうぶつ専門学校	1 8
⑨製菓技術体験	札幌スイーツアンドカフェ専門学校	3 6
延べ受講者計		1 9 9

出所：以上、北専各連提供資料（2019 年版）から抜粋

（２）参加専門学校のアンケート結果

①開催までのやり取り

（回答内容：原文のまま）

・各回の参加人数も伝えていただき、準備がしやすかった。 ・当日の学生のタイムスケジュール以外に、教員、講師の集合時間の記載もあるとありがたい。（複数校回答） ・校内図を事前にいただけたので、教室の準備などがスムーズにできた。 ・機材繰りや人員の確保のため、受講人員の決定はできるだけ早いほうがいい。
--

②開催時期（8月中旬から9月中旬）

（回答内容：原文のまま）

- ・専門学校の年間スケジュールを勘案しても、特に支障はない。（複数校回答）
- ・1年生は進路の考えが深まっていない印象があったが、具体的に考える良いきっかけになったかと思う。
- ・生徒にとっては適切な時期かと思う。
- ・1年生にとっては高校入学後すぐよりも今回の日程のほうが、秋以降の進路活動のきっかけとなりちょうど良かったと思う。2年生にとっても秋以降の具体的な進路選択のきっかけになる良い時期だったと思う。
- ・2年生で開催時期を考えるなら、修学旅行が終わって進路を考えるタイミングも良いのではないかな。
- ・ちょうど良かった。（複数校回答）
- ・進路について具体的に考え始めている生徒も多く、良い時期だったと思う。
- ・進学を検討していない生徒も多かったが、進路を積極的に考え始めるきっかけとなる時期だったと思う。
- ・参加者が2年生ということもあり、具体的に進路を考えている生徒が多く、詳しい話をしやすい時期だった。
- ・1年生は良いが、2年生には夏休み前のほうがオープンキャンパス参加や進路選びの参考になるのでは。

③会場

（回答内容：原文のまま）

- ・特に支障や問題はなかった。滞りなく実施できた。（複数校回答）
- ・重さのある講義用教材を持ち込んだが、教員や生徒の皆さんがお手伝いしてくださり、助かった。
- ・必要な設備を事前に準備していただけており、進めやすかった。（複数校回答）
- ・こちらからの事前のお願いに応えていただき、支障なく開催することができた。
- ・生徒と近くで話をするのができ、とても良かった。
- ・広さも申し分がなかった。延長コードを準備していただくなどして大変助かった。
- ・1教室をご提供いただき、スムーズに準備、受入ができた。
- ・お借りしたプロジェクタなど調整も済ませてあり、支障なく開催できた。

④受講者数、受講態度、受講者への要望

（回答内容：原文のまま）

- ・参加生徒が熱心に聞いてくれたので、とても有意義な時間となった。
- ・人数が各回バランス良く分かれており、生徒も集中して説明を聞いてくれた。積極的な質問などがあると、特にどの部分を聞きたいのかがわかるのでありがたい。
- ・受講者数はちょうど良く、受講態度もとても良かった。（複数校回答）
- ・受講者からあらかじめ質問をいただければ、生徒の知りたい部分をより詳しく説明できたかなと思う。
- ・まじめで真剣に参加してくれていた。積極的に参加していただけた。（複数校回答）
- ・あらかじめ、1回当たりの受講者に上限を設けさせていただいたが、支障なく開催できた。各回とも興味と関心を持って一生懸命受講していただけたことが素晴らしかった。
- ・真剣に話を聞いていただき、明るく楽しい雰囲気が進めることができた。
- ・生徒全員が積極的に実技に取り組んでくれた。受講者数もちょうど良かった。
- ・受講者全員が真剣に聞いてくれた。全体的に態度も良好だった。
- ・1、2年生が混ざっていると、1年生が少し緊張している印象があった。
- ・他分野への進学を考えている生徒も多かったが、積極的に参加してくれていた。（複数校回答）
- ・メモを取りながらしっかりと聞いている生徒が多かった。実習にも意欲的に取り組んでくれた。

⑤対応する高校教員

(回答内容：原文のまま)

- ・機材の搬入、モニターの調整や席の配置など、丁寧に对应していただけた。(複数校回答)
- ・説明を最後までしっかり聞いていただくなど、教員の方々の前向きな姿勢を強く感じた。
- ・先生から生徒に、より身近に仕事を感じてもらえる体験談をお話ししていただき、大変ありがたかった。
- ・大変丁寧に对应してくださり、ありがたかった。(複数校回答)

⑥開催内容(各50分1日3回の講座開催・時間配分)

(回答内容：原文のまま)

- ・高校の授業配分と同様と考え、講座内容も50分授業に合わせて作成したので問題はなかった。
- ・説明と軽い体験でちょうど良い時間だった。
- ・3回の開催には問題はないが、50分の講座に10分の質問時間などがあればベストかと思う。
- ・生徒の集中も切れることなく実施できたので、ちょうど良かった。(複数校回答)
- ・午後2回程度の開催が集中できるのではないかな。(複数校回答)
- ・時間配分等、問題はなかった。(複数校回答)
- ・50分は短く、体験学習の内容が薄くなってしまう。2時間程度いただけるとありがたい。
- ・1回30分にすれば、多くの職業を体験できると思う。
- ・調理製菓では開催時間がもう少し長い方が生徒もイメージが得やすいと思う。

⑦旅費及び謝金

(回答内容：原文のまま)

- ・荷物が多く自家用車での移動が基本なので、その点を考慮していただけるとありがたい。
- ・提出書類が多く、簡素化をお願いしたい。
- ・会場が遠方で公共交通機関を使用する場合、前泊についても考慮していただけるとありがたい。
- ・事前に金額など教えていただければ、事務処理もスムーズに行えるのでありがたい。(複数校回答)
- ・遠方の場合の航空機使用の可否など、事前に明確な情報をいただきたい。

⑧その他

(回答内容：原文のまま)

- ・主催者、参加者から講座内容についての評価があると良い。開催目的に沿っていたか、参加者の満足度も含めた講座内容及び担当講師への評価があると、以後の参考にできる。
- ・講座の開催時間に生徒が体験内容をまとめる時間(レポート作成の時間)も入っているのであれば、あらかじめお伝えいただけるとありがたい。
- ・学年を分けて参加いただけるとより生徒に合ったガイダンスができるかと思う。
- ・次年度もこのような機会があれば、ぜひ参加したい。(複数校回答)
- ・担当する講座が3回ではなく2回の場合、開催をどちらかに寄せて、連続して開催できるようにしていただけると移動時間を調整できるのでありがたい。
- ・早い時期に開催校がわかっているとスケジュールが組みやすい。
- ・当日、集合の時点で全体の流れなどのご説明をいただけるとありがたい。
- ・地方の教育資源の活用など、職業教育に関する意見交換ができる機会に発展すると素晴らしい。

出所：以上、北専各連提供資料(2019年版)をもとに筆者作成

(3) 参加生徒のアンケート結果

①参加生徒感想（職業体験講座・日高会場）

全く 役立たなかった	あまり 役立たなかった	まあまあ 役だった	とても 役だった	未記入
0名	0名	21名	78名	0名
0%	0%	21.2%	78.8%	0%

(感想)

- ・将来への視野が広がった。
- ・お客さんへの接客方法を学べた。
- ・多くのことを学べた。新しい発見をすることができた。
- ・楽しく保育の仕事について学べ、仕事の大変さも分かった。
- ・知りたい職業について知ることができた。
- ・普段体験できないことができて、良い経験となった。
- ・先生方が優しくアドバイスしてくれたので楽しく学ぶことができた。
- ・仕事の中身や何が重要かを詳しく説明してもらえた。
- ・自分の将来への選択肢が増えた気がする。
- ・正直まだ将来何をしたらいいのかなど夢がない。しかし、少しずつ色々なことに興味を持つことができ、将来に向けて積極的にがんばっていこうと思った。
- ・本日はありがとうございました。とても自分のためになりました。
- ・知らないことばかりだったからとても勉強になったし、楽しかった。
- ・自分と関わりのなさそうなものを選んだので、驚くことも多く、新しい発見もあった。調べたいと思ってもしなかったことを知り、想像とは違った内容だったので受けてよかったと思った。
- ・自分の将来について悩んでいて、今の自分に役立つこと、礼儀や自分が興味のある内容を実際に受講してみても将来につながると思った。
- ・体験講座は楽しかったが、どんな人がその仕事に向いているのかなどを教えてくれる時間がほしかった。
- ・このセミナーを通じて自分の進路を改めて考えるきっかけとなり、勉強にもなった。
- ・仕事についての考えや知っておかなければならないことなど何が必要かをゆっくりと考えることができた。
- ・とても勉強になった。職業体験講座がためになった。
- ・自分には何ができて、どうしていけるのかという課題を見つけ、まだ分からないこともこの先沢山あると思うが、今日教えてもらったことを忘れずにこれからも取り組んでいきたい。
- ・明るく楽しそうな先生方ばかりで楽しく授業を受けることができた。
- ・動物関係の仕事の大変さや楽しさを知ることができた。自動車整備士の仕事にも興味を持った。
- ・職業体験講座がとても楽しかった。
- ・今まで関わりのなかった職業体験ができたこと、知っていたことも深く知ることでも勉強になった。
- ・最初から最後まで内容たっぷりの濃い時間だった。学んだことを生かせるよう頑張ります。ありがとうございます。
- ・将来就きたい仕事は複数あり、それらについて分かりやすく教えていただき勉強になった。夢の実現に向けてオープンキャンパスなどにも参加して色々調べようと思う。

②参加生徒感想（職業体験講座・後志会場）

全く 役立たなかった	あまり 役立たなかった	まあまあ 役だった	とても 役だった	未記入
0名	1名	6名	33名	3名
0%	2.3%	14%	76.4%	7%

（感想）

- ・自分が将来就きたいと考えている職種の話を聞き、仕事の内容が分かった。
- ・音楽もデザインも自分には向いていない職業と感じた。
- ・将来への視野が広がった。
- ・知りたい職業について知ることができた。
- ・将来やりたいことが見つけられた。
- ・とても楽しく将来の夢を真剣に考えることができた。
- ・公務員講座は聞きやすい内容で参考になった。デザインの仕事内容が沢山あることを知ることができて良かった。
- ・進路選択の参考になった。
- ・オープンキャンパスに参加してみようと思った。
- ・初めて体験することもあり楽しかった。
- ・分かりやすく興味のある内容ばかりだった。
- ・デザインの職業では色んな職業があることが分かった。また、MV制作にも携わっていることも知ることができて満足。
- ・興味のある職業について知ることができて、とても役に立った。
- ・とても興味深い内容が多く、将来の選択が楽しみになった。
- ・とても楽しく、新たな発見も沢山あり、有意義な時間を過ごすことができた。

③参加生徒感想（職業体験講座・釧路会場）

全く 役立たなかった	あまり 役立たなかった	まあまあ 役だった	とても 役だった	未記入
0名	1名	7名	48名	0名
0%	1.8%	12.5%	85.7%	0%

（感想）

- ・自分の就きたい職業について深く考えることができた。
- ・自分が学びたい講座だったのでとても役立つ内容だった。
- ・今まで分からなかった仕事の内容の話を聞けてためになった。
- ・就職に向けて興味を膨らますことができた。
- ・自分の将来の選択肢が広がった。
- ・色々な業種の仕事内容の詳細を知ることができてよかった。
- ・将来希望していた仕事（音楽）に就くまでの道筋が見えた。
- ・私の興味がある食品系がなかったのでつまらなかった。

- ・内容も面白く、教え方も丁寧だった。
- ・それぞれの仕事の大変さが身に染みて分かった。
- ・興味のあるホテル業界の仕事を深く学ぶことができた。
- ・とても充実した時間を過ごすことができた。
- ・それなりに知識はあると思っていたことも、更に専門的な内容で面白かった。
- ・体験入学に行きたくなった。
- ・音楽業界、公務員について詳しく学べてよかった。
- ・トランスミッションの内部を初めて見ることができ、とても楽しかった。
- ・まだ進路がはっきり決まっていなかったが、興味ある職業をたくさん体験できてよかった。
- ・毎年開催してほしい。様々な分野を体験したい。
- ・とてもためになった。来年も開催してほしい。
- ・公務員の講座では自分の進路について詳しく学ぶことができた。今の自分が今後どんな勉強をしていけばよいのかを改めて考えることができとてもためになった。
- ・今日学んだことは必ず将来役に立つことばかりだった。
- ・今回のセミナーで普段学ぶことのできないことがたくさん学べた。これからに生かしていきたい。
- ・今まで話の聞けなかった仕事のことを聞いたのでよかった。
- ・将来の就職に向けて前向きな気持ちになった。
- ・将来専門学校には行けないけど、行けないなりの努力の仕方を教えてもらい、とても勉強になった。
- ・すぐくやってみたかった体験や講話が聞けたり、学べたことが良かった。
- ・食品以外のことを知ることができてよかったが、あまり必要性を感じられる内容はなかった。
- ・公務員志望だったのでその話を聞いてとても良かった。自分の知りたかった情報や今後やるべきことも見つけることができた。
- ・様々な職業に触れたことで人間関係形成や自己理解能力の必要性を感じた。
- ・今まで分からなかったことや知らなかったことについてセミナーを通じて知ることができたので、今後の進路選択に生かしていきたい。
- ・自分の気になっていたことを詳しく知ることができた。
- ・どの講座の内容も自分の将来に向けて役に立つ時間だった。専門的な知識をこれからは役立てたい。
- ・本当に公務員講座の先生のお話に感動した。名刺がほしかった。
- ・工業とデザインの体験講座が楽しくて体験入学に行きたくなった。社会に出ても必要なことをたくさん知ることができてよかった。
- ・諦めかけていた音楽・放送業界への夢も話を聞いて頑張ってみようと思った。また、専門学校のオープンキャンパスにも行ってみたいと思った。
- ・自分の進路選択の幅が広がり、見たことのないものや、知らなかった知識などを学び、多くの情報をもたらえてとても良かった。車のパーツや部品を見ることができて楽しかった。
- ・自分の進路に役立つ良い機会だった。今日学んだことを生かしてまた進路について考えたいと思った。
- ・自分の興味のある講座を中心に学べたので楽しかった。たくさん身になる話やためになる話を聞くことができて良かった。
- ・とても役立ったと思う。自分はまだなりたい仕事とかないので、今回いろいろ学べたことで将来の進路選択の幅が広がった。
- ・今の自分、これからの自分の両方に必要な情報や知識を得ることができた。

④参加生徒感想（職業体験講座・根室会場）

全く 役立たなかった	あまり 役立たなかった	まあまあ 役だった	とても 役だった	未記入
0 名	1 名	28 名	80 名	0 名
0 %	0.9%	25.7%	73.4%	0 %

（感想）

- ・その職業に就いた時にどういう人になりたいのか、どういうことができる人になりたいのかしっかり自身で考えてみる事ができた。
- ・職業を知ることができた。（同意 28）
- ・実際に体験することができ、学ぶことが多かった。（同意 20）
- ・自分は漁師を目指しているの、希望する職業ではなかったが、どんなことも何回もやれば成長できることが分かった。
- ・将来に向けての資料となった。（同意 11）
- ・公務員のことを多く知ることができた。（同意 8）
- ・就職先の決め方などが大切だということが分かった。
- ・興味があるスポーツのことを知ることができた。（同意 1）
- ・興味のある職業を体験したことにより、さらに興味関心がわき、進路活動について、真剣に取り組めるようになった。
- ・調理講座がとても勉強になった。
- ・専門的な話を多く聞いた。（同意 2）
- ・職業としても、日常生活を送る上でもプラスになることが多かった。
- ・いろいろなことを包み隠さず説明があり、分かりやすかった。
- ・スポーツの講座が面白かった。（同意 1）
- ・音楽の講座が面白かった。
- ・楽しく学ぶことができ、自分のイメージしていたものとの違いに気付くこともあり勉強になった。
- ・義手・義足の着用など貴重な体験ができた。
- ・悩んでいた進路をしばることができた。
- ・将来働くとはどういうことであるか、それをかなえるためにどうするべきかが分かった。
- ・講座数が少ない。
- ・興味のある分野の講座がなかった。
- ・自分のなりたい職業ではないので、とても役に立ったとまではいえないが、様々な話を聞くことができてよかった。（同意 1）
- ・業界の人（それぞれの講師）の話に説得力があった。
- ・離職率の話はどの業種でも役立つと思った。
- ・民間企業に就職するリスクや、求人サイトなどの見方が分かったから。
- ・仕事の内容だけでなく体験談や周りの様子などもきけて、将来のことを見直す良い機会になった。
- ・時間が足りなかった。
- ・話を聞いて、実際にこの職業に就きたいなと思うものがあつた。
- ・進路先の視野が広がった。（同意 1）
- ・将来の夢を見つける良いきっかけとなった。
- ・動物に興味があつたので良い経験ができた。

出所：以上、北専各連提供資料（2019 年版）をもとに筆者作成

(4) 生徒の参加写真

後志会場では、倶知安農業高等学校の生徒 7 名が北海道自動車整備大学校の「自動車整備士の仕事」に取り組んだ。生徒は大手自動車メーカーのスポーツカーを教材にエンジンルームの検査やタイヤの脱着を実地で指導を受けた。写真はまさにタイヤの脱着作業を身をもって経験している姿である。

根室会場では、別海高等学校の生徒 36 名が札幌スイーツアンドカフェ専門学校の「製菓技術体験」に取り組んだ。男子生徒の参加もみられ製菓の基本的な知識や技術、さらに実際の製菓づくりを体験した。写真は製菓づくり前の講義を行っている場面である。

①倶知安農業高等学校の作業風景（講座名：自動車整備士の仕事）



出所：北専各連提供

②別海高等学校の実演写真（講座名：製菓技術体験）



出所：北専各連提供

6 職業体感型教育の課題と今後の展望

6-1 職業体感型教育の課題

現在、北海道内で展開している「職業体感型教育」は専門学校知識や技術の専門性、特異性を背景に、確かな実績と成果を生み出している。企業が実施しているインターンシップにみられる職場体験とは異なり、生徒や学生は仕事そのものに触れ、考え、感じ取るまさに体感する機会を得て職業意識を高めることができる。しかもこの職業体感は中学校や高校など若年層から参加の機会があり、その体感を中学、高校時代で熟成できる期間がある。企業のインターンシップは、長期短期はあるものの仕事を知り就職先を考えるという限られた時間の中で決定しなければならない問題がある。生徒や学生の仕事への適性はもとより仕事の課題や自分自身が担当し遂行する上で必要な知識や技術の不足状況、場合によっては資格の取得など山積する課題に対策を考える時間的猶予はほとんどない。

また、専門学校が「職業体感型教育」を推進していることに高い意義がある。専門学校は専門分野に特化した知識や技術を教授する専門機関である。そして専門分野に特化した専門家を養成する教育機関である。職業を体感する上では企業がまさに適任であるし企業の仕事そのものが職業であることからすれば職業教育は企業の担うべき役割ともいえる。しかし、企業は採用した人材を通じて業績向上に資する人材の養成をおこなうものであって多様な分野を希望する人材を幅広く教育することを考えてはいない。企業が学生の希望を見極め自社への適性を判断するインターンシップの開催は専門学校の「職業体感型教育」とは全く異質なものである。専門学校は専門性を高める基礎力から応用力まで知識や技術の教育に専念している。その習得した知識や技術を活かせる環境として職種、企業への就職を支援している。卒業生はその自覚を持って就職しているのである。

その中で、今後、「職業体感型教育」を開催していく上で、課題を整理しておく。

6-1-1 専門学校の取り組み

(1) 特徴を活かした「職業体感型教育」の実施

専門学校には、専門分野に特化した学校と各専門分野を有する総合学校がある。「職業体感型教育」は専門学校の特徴を活かした教育であることから専門学校間の競合関係を生む場合がある。令和元年に開催されたキャリアサポートセミナー（北海道教育委員会主催事業）は開講講座とそれを担当する専門学校の分類が考慮され競合関係を生まない工夫がされている。一方で、生徒や学生からすれば同じ分野に複数の専門学校が参入していれば選択の幅を拡げることや専門学校の特徴を比較検討できるメリットがある。専門学校側では他校との差別化や特徴を出す工夫など学校全般の改善に向けた動機付けになる。しかし、開催日や開催場所、教育内容などが特定されれば専門学校間の摩擦を生むことも考えられる。今後、「職業体感型教育」に賛同する専門学校が増えれば開催回数の増加とともに専門学校間の摩擦が懸念される。開催日や開催場所、教育内容などの調整には留意する必要がある。

(2) 専門学校間の開催調整

「職業体感型教育」という教育テーマが統一設定されていることもあり専門学校間の教育上の重複から連携の内容に限界が生じる。札幌市内近郊の専門学校は、区域内の小・中・高における「職業体感型教育」が特定の小・中・高に集中することが考えられる。小・中・高の側にしても「職業体感型教育」の効果や重要性を認識すればするほど特定の専門学校への依頼が集中することが考えられる。実際、アンケート調査結果や生徒の感想では「職業体感型教育」への参加、満足度は高い水準にあり、こうした満足度の高い専門学校には継続して開催を希望する志向は強くなるものと考えられる。

現段階では、「職業体感型教育」への意欲的な取り組みの成果が高いことから専門学校間の調整への懸念はないものと考えられるが、「職業体感型教育」の評価が高い中、賛同する小・中・高の賛同が増加するものと考えられる。それだけに専門学校間の調整は重要になるものと考えられる。

6-1-2 学校（小・中・高）への要請

(1) 中・高における一貫した「職業体感型教育」

中学校における「職業体感型教育」は生徒へ刺激を与えることはアンケート調査結果や講座への参加お礼からも推察される。一方で、中学校の教員側では「少し早いのではない

か」という疑念があるものと推察される。確かに、美容業界を例にすれば専門用語さえ当惑するばかりで「何を取得できるのか」という疑問は残る。しかし、職業や職種の一端に現実的に触れることはアンケートの回答結果や自由回答、さらに教員からのお礼状に示されているように「将来の仕事を考えるきっかけ」には成り得る。その体感を今度は高校生で再度「職業体感型教育」の機会を得れば職業や職種の選択は慎重かつしっかりしたものになることが期待される。

今後、「職業体感型教育」は中高一貫型の職業体感型教育を目指していくべきである。

(2) 小学生を対象にした「職業体感型教育」の実施

中学校の段階で「職業体感型教育」は「まだ早い」という認識がある中、小学生を対象にした「職業体感型教育」は無謀ともいえる。しかし、保護者が子息の「職業体感型教育」における職業や職種への気づきに触れると「仕事を考えるきっかけ」になったと感謝の言葉が散見される。一般家庭において家族の従事する会社や組織から「仕事」をイメージすることは意外に容易ではない。そのことは生徒や学生が「自らの仕事を考える」ことを一層困難なものにしている。高校生や大学生の一部では、アルバイトを通じて仕事を考える機会を得るが、それはあくまでも収入を得るためであり将来の仕事を決めるものでもない。結果として生徒や学生は職業や職種のイメージをもつ機会に巡り合うことがないまま就職を考える時に至り内定先へ就職することになる。アンケートやお礼状などから「仕事のきっかけ」や「考えるきっかけ」という言葉が散見されたが、まさに第一段階の「きっかけ」を創る場として小学校、小学生を対象にした「職業体感型教育」を実施することは必要であり重要である。

(3) 校内担当者の養成

進路相談の相手として最も高い割合を示したのは「母親」であり親族である。「自分で決めた」とする割合も高い一方で、通学先の「進路の先生」への相談は、「母親」と比較すれば 5 分の 1 程度の水準にとどまる。職業や職種、企業名から就職状況、進学状況まで豊富な知識と経験が期待されるが、その豊富な知識や経験が活かされる「生徒の相談」の機会が厳しい水準にある。個々の専門学校が「進路の先生」との情報交換の機会を増やすのであれば既に定期的な情報交換は行っているであろうし専門学校の情報はパンフレットや就職情報等で提供されているものと考えられる。その中で、やはり生徒や学生の職業意識を刺激する「職業体感型教育」はその内容をしっかり理解する研修の機会や「職業体感型教育」の場を通じて理解を深めることが必要である。アンケートの自由意見では、オー

ブンキャンパスへの参加や個別のセミナーに参加することで十分との認識が散見されるが、その認識を変える必要がある。

(4) 中・高の進路担当者との連携

現在の「職業体感型教育」は、中学校と高校を分けてそれぞれの事情、中学生であれば今後の進学と高校卒業後の進路のこと、高校生であれば専門学校進学や就職のことをふまえて講座の内容を変えている。これは専門学校側で、中学生あるいは高校生への配慮であり進学や就職に向けて必要な知識や技術を教示して「考えるきっかけ」を作ることを目的にしているからである。中学生で「職業体感型教育」に参加していれば職業や職種で考えた成果を基に高校生で改めて「職業体感型教育」に参加すれば、考えたことをさらに深耕し自分に合った進路を決めることが期待される。中高連続して個々の生徒の進路を把握することは現実的ではないが、少なくとも専門学校が提供した「職業体感型教育」の内容を理解していればある程度の継続性のあるサポートが実現できるものと考えられる。そのためには、中・高の進路担当者の連携が必要であり、専門学校側でもこうした認識のもと「職業体感型教育」を実施していくべきである。

6-1-3 運営資金の確保

本報告の「次世代人材職業体験推進事業」や「進路探究学習オリエンテーリング事業」などは自治体の支援で開催している。貴重かつ重要な支援として「職業体感型教育」開催に不可欠なことである。全道的な広域開催を実現することや中学校・高校の協力を得る上でも国・自治体の支援は重要である。しかし、「職業体感型教育」は全道の中学校・高校から期待されるものの日程や場所、講座内容の制約はあるが、事業費予算内の開催は中学校・高校の「職業体感型教育」開催の要請に十分に対応できない現実がある。「職業体感型教育」が教育関係者から評価されることや参加者である生徒・学生の満足度、さらに保護者の理解が高まることで開催スケジュールや施設・設備の手配が困難となり開催に至らないケースは増加傾向にある。さまざまな工夫や努力、そして関係者の協力は前提とすべきことではあるが、やはり運営資金の確保は検討すべき課題である。国・自治体へのさらなる協力要請に説得力を持たせる意味でも「職業体感型教育」の生徒・学生そして保護者の“生の声”を丁寧に聞き取り関係部門への具申を図るべきである。

6-2 今後の展望

「職業体感型教育」は、現在の早期離職者減少の防波堤として大きな期待が寄せられている。本報告書で紹介した「職業体感型教育」に参加した多くの生徒・学生が職業意識を高め「将来の就職を考えるきっかけとなった」と回答しているように何らかの自覚を持ってこれからの学生生活を送るものと期待できる。また、保護者が「職業体感型教育」に関わることで子息の変化を実感し家庭内で「将来の就職」を考える機会づくりにも貢献しているものと考えられる。こうした子息である生徒・学生の変化を専門学校や中学・高校の教職員が認識し、さらなる「職業体感型教育」の質的向上をもたらし生徒・学生に新たな刺激を与える機会となる、まさに好循環を生む端緒にあるものと考えられる。

そこで、今後の生徒・学生と保護者との新たな関係性、企業との新たな関係性の構築、国・自治体との関係について提言する。

6-2-1 三位一体としての専門学校、児童・生徒・保護者、教員

生徒は進路の検討に際しアンケート結果からは「母親」への相談が最も高い割合を示していた。卒業生の進路結果や業界情報が豊富にあるとされる学校内の「進路担当者」への相談は実際のところ低い水準にあった。この背景には何があるのか判然としない中、「母親」への相談は幼少の頃から自分自身を知り最も身近な存在であることから生まれた親和性や信頼感が根底にあるものと考えられる。

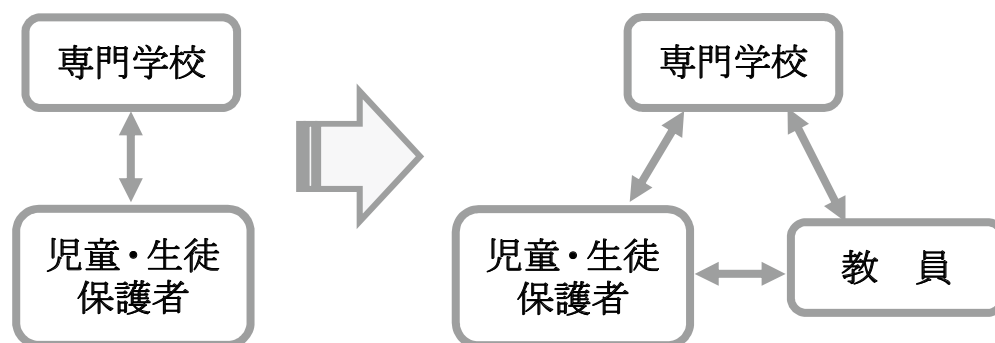
しかし、「母親」や「親族」が多岐にわたる職種や業界を精通していることは想定できず「母親」が知る範囲に限定された職種を進路検討の中心に置かざるを得ない状況が存在している。このことは「母親」の期待と生徒の進路希望が一致している場合は支障がないが、「母親」と生徒の志向や希望が異なった場合、職種のミスマッチから早期離職に至るケースが考えられる。その意味でも「母親」などの保護者との関係性の構築と教育の機会是不可欠なものである。

現在の「職業体感型教育」では主が児童・生徒であり保護者の囲い込みまでは至っていない。関心のある保護者が生徒・学生を通じて進路を検討する機会になっている。これは児童・生徒そして保護者を一体と見ているからであり、今後は専門学校、児童・生徒・保護者、そして教員が三位一体となり、「職業体感型教育」のあり方を考える必要がある。児童・生徒と保護者を一体で見ることは外形的に見ているだけであり、児童・生徒は希望

の職種、仕事、企業への就職、保護者はそれを方向付けたり応援する立場であり本質的には異なる思いにある。児童・生徒そして保護者に理解、納得してもらうためには教員の存在が欠かせない。児童・生徒の職業意識は発芽の状況である中、その保護者でさえ職業意識は自己の経験の域を出ることは困難である。こうした状況に客観的な視点で経験に基づいた意見具申や企業、職業情報を有しているのは教員に他ならない。

児童・生徒に必要な情報は何か、保護者に必要な情報は何か、そうした状況、事情を知る最も身近な教員、それを俯瞰できる立場となる専門学校が児童・生徒・保護者、教員の三位一体となる新たな関係性を構築していくべきである。

図表 6-1 専門学校と児童・生徒・保護者、教員の三位一体化



出所：筆者作成

6-2-2 新たな企業連携の枠組み

学生を中心に就職側と採用側の認識は対立関係にあると考えることができる。学生は給与などの好条件や自己の能力発揮を希望するしそれを支援する学校や保護者は「できるだけ良い会社への就職」を切望している。一方、企業側は人事担当者が口にする「自分で考えて行動できる人材」いわゆる能力の高い人材の採用を切望している。「就職」と「採用」はそもそもこうしたミスマッチともいえる状況から何らかの接点を見出すことにある。その際、企業側の業務内容は、例えば販売や製造のように基本的な業務があり日々の業務改善などから進化する業務がある。進化する業務には、新たな知識の創造や先進的な技術があり、そこに企業の先進性が存在する。

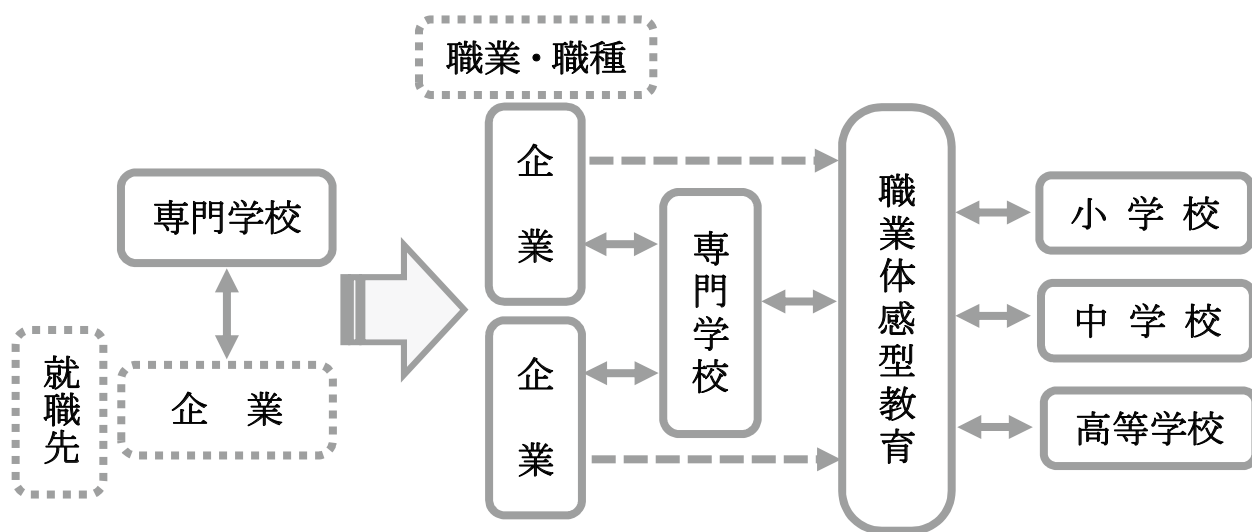
企業の先進的な知識や技術は、企業から創造されるものでありそれを吸収し専門学校のカリキュラムに反映できれば学生の知識や技術は企業に後れをとることはなくなる。まさに先進的な知識や技術を習得する場が専門学校として存在することになる。その意味では、

企業との新たな連携の枠組みを検討しなければならない。ここに「就職」や「採用」の思惑が入ると、就職側はいたずらに学生間の競争を刺激することや企業側の「青田買い」を助長することになる。

「職業体感型教育」では、企業の先進的な知識や技術を学ぶことができる場として企業の協力のもと開催できる企業との新たな連携枠組みを創造することが不可欠である。

専門学校にとって企業は学生の就職先である。この関係に基軸となる「職業体感型教育」を設定し、専門学校は先端にある企業の知識や技術を小学校・中学校・高等学校の生徒に教授する。ここで重要なことは、企業側に職業体験型教育の基本理念を周知し生徒の職業認識をいかに高める場であるかを徹底することである。企業の会社説明会や商品・サービスの解説のような営業や採用活動に陥ることがないように留意しなければならない。

図表 6-2 企業との新たな連携構図



出所：筆者作成

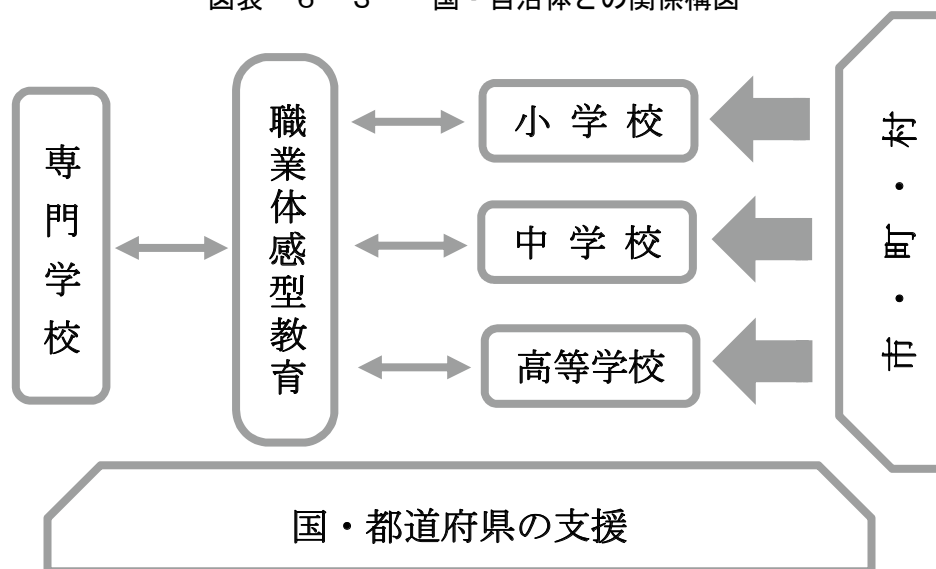
6-2-3 国・自治体との関係

現在、「次世代人材職業体験推進事業」や「進路探究学習オリエンテーリング事業」は自治体支援のもと実施されている。自治体による支援は公益的かつ広域的な観点から北海道全域を網羅した事業展開を可能にしている。そもそもこうした支援事業が無ければ、個々の専門学校だけで、あるいは複数の専門学校がある程度連携して「職業体感型教育」を実践することは不可能である。例えば専門学校が、学校所在地から他地域、とりわけ全道的な「職業体感型教育」を実践することは他の専門学校と無用な軋轢を生むだけである。ま

た、同様な分野を展開する専門学校が共同して「職業体感型教育」を実践することにも限界がある。それ以上に、専門学校の経費負担は甚大になり本業の学校運営にも支障が出る。資金的な負担はもとより人的な負担、例えば教員の講義や職員の会場手配、中学高校との交渉や場所の選定、そして開催日程では自校の行事日程を考慮しなければならず個人の業務負担は計り知れない。実際、年間相当数の「職業体感型教育」講座を開講しているが、これは自校の開講講座以外のものであることにくわえ毎月のように「職業体感型教育」を開講していることもある。

こうした大きな負担をともなう「職業体感型教育」は、各専門学校の自助努力では限界がある。また、「職業体感型教育」を展開していく上で、北海道内全域の中学校、高校を対象とする場合、国、自治体の支援は不可欠である。地域に密着した人材育成機関である市町村立の中学校、道立の高校は、地域経済への影響は大きく、とりわけ若年層の早期離職者は少子高齢化にともない人材不足が指摘される中、地域企業に定着し長期的な労働力の提供が不可欠である。その意味でも国、自治体の「職業体感型教育」における大きな役割を果たすことを期待せざるを得ないし、「職業体感型教育」を推進する上で不可欠な存在である。

図表 6-3 国・自治体との関係構図



出所：筆者作成

Ⅲ 組 織

1 職業体感型教育発信委員会・分科会

職業体感型教育発信委員会開催要領

1 目 的

文部科学省委託事業「専修学校と地域の連携深化による職業教育魅力発信力強化事業 -専修学校と各地域の連携による「職業体感型教育」等の効果検証- 」において、職業体感型教育の効果を検証するとともに、あり方を協議するため、「職業体感型教育発信委員会」（以下、「委員会」という。）を開催する。

2 構 成

- (1) 委員会の構成は別表 1 のとおりとする。
- (2) 委員会に委員長をおく。委員長は公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会の副理事長（広報企画担当）をあてる。
- (3) 委員会には必要に応じて、関係者を出席させることができる。

3 分科会

- (1) 委員会に分科会をおく。分科会は職業体感型教育に関する資料の収集、分析評価、検証などを行い、委員会における協議検討に必要な資料を作成する。
- (2) 分科会の構成は別表 2 のとおりとする。

4 設置期間

委員会の設置期間は、令和 2 年 3 月 13 日までとする。

5 事務局

事務局は、公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会におく。

6 その他

- (1) この要領は、令和元年 1 1 月 5 日から適用する。
- (2) この要領に定めるもののほか必要な事項は、委員長が定める。

別表 1

所 属	職 名	氏 名
公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会	副理事長	布川 耕 吉
同	副理事長	浅井 洋子
同	副理事長	野 又 淳 司
同	常任理事	倉田 恵
同	常任理事	杉澤 投 吉
同	常任理事	前 鼻 英 蔵
同	常任理事	齋 木 修 二
同	理事	開 田 仁 司
同	理事	野 村 昌 昭
同	理事	柏 尾 典 秀
同	専務理事	横 山 和 博
北海道教育庁学校教育局	高校教育課長	藤 村 誠
札幌市教育委員会学校教育部	教育課程担当課長	佐 藤 圭 一
北海道高等学校進路指導協議会	会長	平 田 嘉 宏
北海道キャリア教育・進路指導研究会	会長	山 中 高 弘
北海道総務部法務法人局	学事課長	近 藤 史 郎
北海道経済部労働政策局	人材育成課長	安 田 仁 文
北海道経済同友会	常務理事	寺 澤 重 成
一般社団法人全国専門学校情報教育協会	専務理事	飯 塚 正 成
青森大学	学長	金 井 一 頼
大阪経済大学	教授	吉 野 忠 男

別表 2

所 属	職 名	氏 名
公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会	副理事長	布川 耕 吉
同	常任理事	前 鼻 英 蔵
同	専務理事	横 山 和 博
青森大学	学長	金 井 一 頼
大阪経済大学	教授	吉 野 忠 男

2 事業実証検討会

事業実証検討会開催要領

1 目 的

文部科学省委託事業「専修学校と地域の連携深化による職業魅力発信力強化事業 - 専修学校と各地域の連携による「職業体感型教育」等の効果検証- 」において、実務面から、事業の枠組みや方向性、検討内容などを整理するため、「事業実証検討会」（以下、「検討会」という。）を開催する。

2 構 成

- (1) 検討会の構成は別表のとおりとする。
- (2) 検討会に代表をおく。代表は公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会の常任理事（広報企画担当）とする。

3 設置期間

検討会の設置期間は、令和2年3月13日までとする。

4 事務局

事務局は、公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会におく。

5 その他

- (1) この要領は、令和元年10月9日から適用する。
- (2) この要領に定めるもののほか必要な事項は、代表が定める。

(別表) 事業実証検討会構成

常任理事	前鼻英蔵
理事	開田仁司
理事	野村昌昭
理事	柏尾典秀
専務理事	横山和博
実行委員長	栗塚暁人（進路相談会）
実行委員長	笠島史生（広報事業）
実行委員長	浅井 学（キャリア教育プログラム）

IV 会議等開催状況

1 第1回事業実証検討会

○日 時：令和元年10月9日（水）13時15分～16時

○場 所：札幌ガーデンパレス 5階「すずらん」

○出席者：委員7名

○内 容：

①会議の開催にあたり、事業の趣旨、取組予定の内容等を説明した

②配布資料に基づき、連合会が主催あるいは開催に関わっている「職業体感型教育」それぞれについて、実施概要を説明した

③事業の進め方を協議した結果、「検討の視点」を明確にする必要があるとされ、事業実証検討会の意見として第1回職業体感型教育発信委員会に提示することとされた

2 第1回職業体感型教育発信委員会

○日 時：令和元年11月5日（火）14時～16時

○場 所：ホテルポールスター札幌 4階「ライラック」

○出席者：委員20名

○内 容：

①会議の開催に当たり、事業の趣旨、取組予定の内容等を説明した

②配付資料に基づき、連合会が主催あるいは実施に関わっている「職業体感型教育」それぞれについて、実施概要を説明した

また、事業実証検討会で協議結果を「検討の視点」として提示した

③各委員から事業の進め方、実施している「職業体感型教育」等に関して意見をいただいた



3 第2回事業実証検討会

○日 時：令和元年12月2日（月）15時～17時

○場 所：札幌ガーデンパレス 5階「あやめ」

○出席者：委員8名

○内 容：

- ①第1回職業体感型教育発信委員会の開催結果を報告した
- ②職業体感型教育に参加している関係機関等の意見収集を強化するため、未実施の対象者に対する調査を実施することとした
- ③各専門学校が行っている職業体験講座の状況を把握するため、オープンキャンパスにおける職業体験講座の実施状況について調査することとした

4 第1回分科会

○日 時：令和元年12月18日（水）9時30分～11時30分

○場 所：札幌ガーデンパレス 5階「あやめ」

○出席者：委員3名

○内 容：

- ①「職業体感型教育」に関する分析・評価資料の枠組み案を配布し、内容及びスケジュール等について協議した
また、分析・評価資料については第2回委員会に提案し、内容を協議することとされた
- ②2月7日に開催予定の成果報告会で報告する内容について協議した

5 成果報告会

○日 時：令和2年2月7日（金）11時～11時50分

○場 所：中野サンプラザ（東京都中野区中野4-1-1）

○出席者：事業関係者10名を含む計33名

○発表者：大阪経済大学経営学部 吉野忠男教授（職業体感型教育発信委員会委員）

○内 容：

連合会が取り組む各種職業体感型教育に関する分析・評価の概要を報告した



6 第3回事業実証検討会

○日 時：令和2年2月10日（月）13時～15時

○場 所：札幌ガーデンパレス 4階「雅」

○出席者：委員8名

○内 容：

- ①2月7日（金）に東京・中野サンプラザで開催された「成果報告会」の開催結果を報告した
- ②職業体感型教育の分析・評価結果について審議した。審議結果を踏まえて第2回職業体感型教育発信委員会の協議資料とすることとされた
- ③第2回職業体感型教育発信委員会の進め方等について協議した

7 第2回職業体感型教育発信委員会

○日 時：令和2年2月14日（金）10時～12時15分

○場 所：札幌ガーデンパレス 4階「高砂」

○出席者：委員19名

○内 容：

- ①協議に当たり、事業の概要並びにこれまでの取組内容を報告した
- ②連合会が取り組む各種職業体感型教育に関する分析・評価結果を資料とし、その内容について協議、意見交換を行った
- ③職業体感型教育の分析・評価結果を踏まえ、今後の取組について意見交換を行った



